

G. A. クリモフ著『能格性総論概説』についての覚書

石田修一

はじめに

『類型学研究』誌 2 号で紹介したクリモフ著『内容類型学の原理』(1983) に次いで、ここでも同様の手法で『能格性総論概説』(«Очерк общей теории эргативности», 1973) について解説しつつその問題点等についても記述しておきたい。同著が出版されて以来すでに 40 年近く経過するが、これが他の諸著作とともに言語類型学にとって重要な価値をもつ古典的名著であることに変わりはない。実は最近ロシアのリブロコム(ЛИБРОКОМ) 社は、過去の重要な内外の言語学諸業績を精力的に再版しており、本研究誌 2 号拙稿の冒頭で紹介した内容類型学に関するクリモフの重要なモノグラフも一括して 2009 年に再版している。一方、これに相呼応するかのように、わが国でもすでによく知られた「言語学の諸問題」誌は 2009 年 3 号に現在活躍中の言語学者・日本語学者アルパートフ(В. М. Алпатов) の論文「G. A. クリモフの言語構想」(«Лингвистические идеи Г. А. Климова») を掲載している(cf. 本誌本号に木下晴世氏による邦訳; また同論文についての本稿筆者の見解は本稿最後に触れる)。ともかく、こうしたロシアでの動きに対する日本での呼応として同著に関して今記述しておくことは、時宜を得たものかもしれない。

本稿筆者なりに同著の特徴を簡単に述べれば、①能格性を能格構文のみならず能格構造総体として記述したこと、②能格構造を統一的体系組織として捉えると同時に能格諸言語に亘って展開される諸矛盾したがって多様性の起因が活格性にあることを明らかにしたこと、すなわち能格性現象を弁証法的な視点から記述したこと(この点でディクソン、コムリー、キブリクと大きく異なる)、にも拘らず、③能格性ととりわけ動詞の語彙化原理のよりの確な用語での定式化の模索段階であったろうこと、である。この③に関連してここでも再確認の意味で『内容類型学の原理』から関係部分を抜粋しておく。クリモフは次のように述懐している: 能格構造は主格構造との構造的近似性のマクシмумによって記述されて来たが、「主体と客体の概念がこの組織の深層的な刺激動因の特徴づけによって非関与的であるというテーゼ」は、今日では概ね広く認知されたものであり、「そのことは能格組織の位置格—能格と絶対格—あるいはそれと機能的に同等の能格系列と絶対格系列の人称接辞の主体機能と客体機能の伝達が未分化・融合的であるという周知の

事実からだけでも例証できる。したがって、ここでの他動詞と自動詞の区分ではない **agentive verb** と **factitive verb** の区分 (→註 25)、大雑把にのみ『直接』補語と『間接』補語という認定を下し得る独特の補語の構成、能格構文と絶対構文の対立を顕す特有の文類型、態の形態範疇の欠落、名詞曲用パラダイムにおける特有の格単位と動詞活用の人称指標系列、その他若干の諸特徴は、総体として単一の類型的構造を構成しているのであり、この構造組織は、キブリク (А. Е. Кибрик) に続いて、**agentive** と **factitive** と定義される独自の意味役割の反映に定位したものと考えべき根拠が存在する」；「この場合、この **agentive** の概念は、研究の現段階では、改造変換的行為 (*преобразующее действие* [transforming action]) の何らかの状況ないしは条件(行為実行者、行為手段、行為の受信者 (addressee) として説明することができる。例えば、能格のような能格組織の格パラダイム特徴の背後には主体機能も間接客体的(具格的、所格的)機能も存在している。同時に、**factitive** (フィルモアの概念とは異なる)の概念は行為の直接的担い手を包括する。この概念を特徴付けてキブリクは次のように指摘する：『両方の場合とも (**factitive** の概念の二つの機能を指すークリモフ)場の最も近い参与者一場に直接的に参加する共演項 (Aktant) のことである』¹。・・・したがって、非他動的行為の主体が他動的行為の客体と同様に解釈されるのに対して、他動的行為の主体は何か別様に解釈されるような構造組織とする、多くの記述研究や理論研究に広く行き渡っている能格構造組織の定義は正確さを欠くばかりでなく、(行為の他動性と自動性を援用している以上)不完全であると認定しなければならない。この定義はここに存在する他動的行為の主体と間接客体の解釈の重なりを考慮していないからである。・・・筆者も過去において能格的文類型の定義を定式化しようとしてこの不完全さを免れることができなかった。・・・ここに提起した付言は能格性全体論にとって原理に関わる重要な意義をもつ。このことを無視すれば、具体的な言語の共時的な状態だけでなくその通時的展望の歪曲を引き起しかねないからである。例えばこの付言に照らして初めて、他動的行為の主体と間接客体 (とりわけ手段と受信者) の表現の相互分離が言語構造の主格化過程への重要な一歩を証すること、したがってこれまでの定義を能格組織自体の特徴づけから排除すべきこと、が明らかになる」²。今日の時点で「能格性総論概説」を読むときには、以上の点に留意しておく必要がある。

¹ cf. 本稿註 31 (キブリクの見解)。

² Г. А. Климов, Принципы континентальной типологии, Наука, 1983 (Либроком, 2009), pp.110, 111, 112.

本書は、次のような構成より成る：序―第1章 能格性研究史から―第2章 能格論の基本概念の定義によせて―第3章 共時態における能格性（能格性の語彙的包含事象；能格性の統語的包含事象；能格性の形態的包含事象；能格性の随件事象）―第4章 通時態における能格性（語彙；統語法；形態）―第5章 能格構造の起源によせて―結語。

序

能格性問題はすでに一世紀以上に亘って言語学者達の関心の的となって来たにも拘らず、能格性の本質に関する理論問題は未解明である。例えば未だに統語的観点からする能格構文の定義が存在せず、現有の定義は結局その構成成分の形態的特徴づけの記述に終始している。

内容類型学の見地からして、能格性問題は特段の重要性を持つ。能格性を専ら言語の構造自体が引き起す現象として提示する傾向が最近目立って増えているにも拘らず、能格性は相当程度主体と客体、他動的行為と非他動的行為の伝達に定立していることからしても、「能格性は、つまるところ、言語と思考間に存する有機的な繋がり of 現れの一つかも知れない、という考えに立ち返らせる」(p.4)。能格性に対比される主格性や活格性もそれぞれ独自の視角からその「深層的」内容＝構造化原理を反映したものであるとするならば、能格性問題の解明は「言語と思考の相関性の弁証法を側面から闡明し得るかもしれない」(p.4)、とする期待を述べる。

能格性問題の研究は、複合した三つの異なる概念たる、能格構文 (эргативная конструкция предложения)、能格的文構造 (// 文類型) (эргативная структура [//типология] предложения)、能格構造 (эргативный строй) という概念を峻別することが先ず必要であり、これ等は能格論にとって同程度に重要な概念である(これについては第2章で詳述されるので、ここでは説明を省略する)。また、これらはクリモフが、活格構造言語の記述の前提として挙げた同様の区別(活格構文、統一体としての活格的文類型、活格言語構造総体の区別)からすでに周知のところであろう³。

能格的文構造は、起源の面でもその形式類型学的パラメーターの面(融合型、膠着型、孤立型)でも多様な諸言語に現れ、その拡大分布圏はアプハズ・アディゲ語群、カルトヴェリ語群、ナフ・ダゲスタン語群という、「能格論にとってすでに古典的な3群」を越え

³ cf. 例えば、クリモフ著『新しい言語類型学―活格構造言語とは何か』(三省堂) p.44 を参照。

て極めて広範囲に及ぶ、として分布域とその言語名が挙げられる（近東、インド・イラン、シナ・チベット、パプア、オーストラリア、ポリネシア、チュクチ・カムチャッカ、北米、南米等々）。その内、インド・イラン諸語、カフカース諸語、ポリネシア諸語の相当数は、その構造が少なからず主格性の特徴を含み、一貫性を欠く能格言語という特徴がある。また、これまで能格言語と見なされて来た多数の北米諸語や南米諸語の中には活格構造と認定しなければならないものも含まれている。

能格的文類型の諸研究は、実際には結局極めて限られた言語集合や、また時には単一言語(バスク語)に適用される個別的な能格理論(正確には、能格構文論)の構築に帰結しており、比較類型学的な研究というよりむしろ性格学的な研究の枠内のものであった。その唯一の例外はメシチャニーノフ (メシヤニーノフ И. И. Мещанинов)、カツネリソン (С. Д. Кацнельсон)、ブイホフスカヤ (С. Л. Быховская)のようなソヴィエト・ロシアの言語学者群であって、彼らの研究こそが能格性総論(全体論)の基礎を築いた。勿論、性格学的な研究自体の独自の意義は否定できないが、それと並行してメタ理論(能格性総論・全体論)の構築が必要である。個別言語の性格学的研究の範囲内だけでは能格性の原理は解明できない。そこで、クリモフは本書で、「わが国の能格論者達の諸労作に明、不明の形で含まれる一連の構想を発展させること」と「問題群の研究成果をできる限り体系化すること」を自らの課題とした(p.7)。つまり、「このテーマを扱ったその他大多数の研究とは違って、言語の語彙的、文法的諸現象の複合体として実現される能格性の理論的諸問題群の考察」を試みたのである(p.8)。

第1章 能格性研究史から

能格性の研究は初期の段階では極めて限られた資料を基にし、しかも専ら能格構文の研究に限定されていた。「能格性の研究史において常に中心的な位置を占めて来たのは、能格構文の研究である」(p.9)。

この能格構文論の研究には、二大潮流がある。同構文の成分である他動詞述語を態(залог [voice])の観点から解釈したもので、それぞれ能格構文の受動性説と中立性説である⁴。

受動性説は19世紀半ばから20世紀第1三半期末まで支配的であった学説である。ロシアのカフカース学者ウスラル (П. К. Услар) がナフ・ダゲスタン諸語について、シュ

⁴ cf. 山口巖著『類型学序説ーロシア・ソヴェト言語研究の貢献』京都大学学術出版会 1995, pp.61-64

ーハルト (H. Schuchardt)、ユーレンベック (C. Uhlenbeck)、ミューラー (F. Müller) 等がバスク語について、ウスラル、マール (H. Я. Мapp)、シューハルト、トルベツコイ (Н. С. Трубецкой) 等がカフカース諸語について、インド・イラン諸語についてグリーソン (G. A. Grieson)、ヘルンレ (R. Hoernle)、ガイガー (W. Geiger) 等が、フルリ・ウラルトゥ語やエスキモー・アリユート語については初期のメッシュャニーノフ、マール、ユーレンベック、タルビッツァー (W. Thalbitzer) 等々、の錚々たる学者群が受動性説に与したのである。この説の誤りは今日すでによく知られているが、それは能格構文を印欧語の受動構文に見立てて、その論拠を、構文の名詞要素が「主格」(絶対格のこと)と斜格によって形式化されること、動詞述語と「主格」名詞が「一致」すること、に求め、その結果、能格構文の他動詞の受動的性格とやらが認定されたのである。このことはまたこれ等諸言語における対格の欠如を証するものであった。例えば、ウスラルは次のように書いた：「あらゆる能動動詞は、働きかける対象と働きかけを受ける対象を前提としている。これ等の対象の相関的な役割の違いは、それら対象がおかれる格の違いによって表される。したがって、印欧語の大部分では、働きかける対象は主格におかれ、働きかけを受ける対象は対格におかれる。アヴァール語やチェチェン語には能動動詞はなく、あるのは受動動詞のみである：働きかける対象は具格 (instructiv, activ) におかれ、働きかけを受ける対象は主格におかれる」⁵。マールも、古代グルジア語の *spasalar-man* (司令官 *ergative*) *ḱrib-a* (集めた *aorist/3/sg*) *laškar-i* (軍 *nominative*) 「司令官が・集めた・軍」の文の *-man > -ma* をいわゆる「代名詞的与格」すなわち特殊な斜格と捉え(本来、与格は *-s* 語尾)、また動詞形(接尾辞 *-e* や幹母音 *i, a*)に受動性指標があると主張し、結果として「司令官には・集められた・軍が」(*военачальнику собрано войско*) の文意を捉えたという。しかし、これらは受動性指標ではなく、「動詞の態 (залог[voice]) の意義の伝達とは全く無関係である」(p.13)⁶。

中立性説は「能格構造言語の構造的独自性を洞察して、それら諸言語の文類型をそれに相応しい用語で記述しようとした点に特徴がある。この説の本質は、概して、これ等の

⁵ クリモフ著(拙訳)「ソ連邦における類型学研究(20-40年代)」(科研報告書『ロシア・ソヴィエト言語類型論の研究』—代表者柳沢民雄 2002, p.247 に所収)。

⁶ マールは *ḱrib-a* 「彼がそれを集めた」によって幹母音 *i* を、*mo-w-ḱal* 「私が彼を殺した」によって幹母音 *a* を例証しようだが、これらは語根の母音交替として現れる要素である。接尾辞 *e* の例がないが、これは態 (voice) 指標つまり受動性指標ではなくアオリスト 1・2 人称に現れる語尾である：*da-v-ḱer-e* (I wrote it), *da-ḱer-e* (you wrote it), *da-v-ḱer-e-t* (we wrote it), *da-ḱer-e-t* (you all wrote it) (*v* は 1 人称主体マーカー、2 人称主体マーカー、3 人称直接客体マーカーはゼロ。クリモフ例では *v* → *w* と表記)。また、名詞曲用の例：*husband* = *kmar-i* (nom), *kmar-ma* (erg), *kmar-s* (dat), *kmar-is* (gen), *kmar-it* (inst), *kmar-ad* (adv), *kmar-o* (voc)。

諸言語には態の対立が欠落しているのだから・・・動詞述語の形と能動態・受動態の対立の間には相関性がないという認定を下した、という点に尽きる」(p.19)。要するに、この説は、能格構文には能動性も受動性もなく態の点で中立的だ、態の区別がない、という認識を示したもので、20世紀30-40年代に急速に広がって行った。とりわけ、トロムベッティ (A. Trombetti)、マルティネ (A. Martinet)、クリヤーヴィチ (J. Kuryłowicz)、フォクト (H. Vogt)、ボカリョフ (A. A. Бокалев)、ビホフスカヤ、メッシャニーノフ、カツネリソン、ヤーコヴレフ (Н. Ф. Яковлев)、チコバヴァ (А. С. Чикобава)等の学者群がこれに与した。しかし、態の点で中立的だという認識は、「その具体的解釈の上では幅広い裁量を残す」(p.19)ことになった。中立性説を基礎とする考え方の中で特に有力であったのは、他動詞の形態構造の特徴に能格構文の動因があるとする見方であるが、それは結局二大潮流に分かれて行った、すなわち、能格言語の他動詞に態の形態範疇の区別がないことがその特徴だとする研究者と、さらに踏み込んで、他動詞語基の名詞的性格がその特徴だとする研究者である。前者を代表するのは、ボカリョフ、ビホフスカヤ、メッシャニーノフ等である：例えば、「印欧諸語には能動構文と並んで受動構文もあるが、ヤペテ諸語には原則として受動構文は存在しない。受動性の対立がないのだから、能動性については語るべくもなからう。全ての資料は、当該構文が能動性と受動性を未分化に融合したものだ」と解釈し得ることを裏付ける」(ビホフスカヤ) (pp.20-21)。後者は、能格諸言語の中に能格構文の主語を属格におくものがあること、動詞述語の人称接辞と名詞の所有接辞とが同一であること、を根拠に、限定語としての属格主語と「被限定語」としての動詞述語の語結合を構想したのである。そこで、これは能格構文「所有性説」と呼ばれる。フランスの言語学者グラスリー (R. de la Grasserie)、ドイツのフィンク (F. N. Fink) 等々が所有性説であった。メッシャニーノフも30年代後半から所有性説に肯定的態度を取るに至った(p.22)。ただし、メッシャニーノフの場合は、「言語発達の一元論」(p.22)を取らず、所有性と能格性の間に歴史的接点の可能性もあり得る、としたのである⁷。クリモフは、所有性説に対しては否定的である。他動詞の名詞的性格を認定する場合、留意すべきこととして次の二点を挙げている(p.23)。第一に、属格とする認定が不的確である。例えばエスキモー語の一般斜格すなわち能格・斜格兼務的な格を属格

⁷ クリモフは、能格構造の起源である活格構造の析出に極めて接近しながら、「多くの研究者に追隨して」所有性説へ傾いて以後のメッシャニーノフについて注意している(クリモフ同著、三省堂、p.21)。現代では、ブルガリアのスラヴ学者イヴァン・ドブレフも所有性説の影響下にある研究者の一人であろう。同氏の場合は、所有性を基にして活格構造を構想している、と見られる。cf. イヴァン・ドブレフ著(拙訳)『古代ブルガリア語文法』、大阪外大学術研究双書、1993(例えば§36を参照)。

と解すること、ラーク語の属格兼務の能格はさらに共通ダゲスタン語の具格に起源をもつこと、第二に、動詞と名詞という相関的な概念において動詞の名詞起源を証する十分な根拠がないこと。カフカース学における名詞性説はマールの発言の踏襲であること、この種の唯一の例外たるインド・イラン学における名詞起源の動詞述語も実は受動分詞(*-ta)の他動詞形への再編の結果にすぎない、と指摘する(p.24)。

専ら能格構文の研究に注意を集中してきた状況の中では、当然のことながら、格パラダイムの問題は研究の圏外に置かれて来た。勿論能格言語の格パラダイムが主格言語のそれと異なることは当初から気付かれていた。例えば受動性説の観点からする対格欠落の説明(ウスラル)、同じく受動性論者ユーレンベックによる *Agens* (能動格) と *Patiens* (受動格) の区別を経て、能格言語の基本文法格について初めて「能格」という用語を使ったのはディル (A. Dirr) であり、また「絶対格」という用語はエスキモー・アリユート諸語を記述したタルビッツァーに遡るという。

さらにまた、長い間、能格構文に並行して存在する文類型(モデル)に関する認識も曖昧なままであった。そうした状況の中で、能格文「モデルの説明において決定的な貢献を行ったのは 1930 年代のソヴィエトの言語学者等である」(p.26)。特段の重要な意義を持つのは、メッシュャニーノフ、カツネリソン、フィホフスカヤの活躍である。彼らの最大の成果は、能格性の具体的諸問題の歴史的解釈、能格性全体論(総論)の構築、「能格性を能格構文そのものの枠を越えた、言語構造の体系組織的相関現象のある種の複合体と考えたこと」(p.28)である。ここには、能格構文そのものやそれだけを切り離して、あるいはまた体系全体の中で存在する他の文類型を飛び越えて能格構文を主格構文と比べる、という状況を克服して、能格構造総体の中で能格構文やそれと並行する文類型、さらに格パラダイムを考察する態度、また「歴史的側面の研究を日程に載せる」、すなわち能格性を通時的展望の下に描き出そうとする態度が見える。つまり、クリモフのいう体系性と歴史主義の重視の原点がある。

能格論のその後の発展に重要な役割を演じた内外の諸研究を挙げているが、その第一として、特にカフカース諸語の統語論分野の記述研究を挙げている(ヤーコヴレフ、ボカリョフ、ガヂエフ (М. М. Гаджиев)、ハンマゴメドフ (Б. Г. Ханмагомедов)、アブドゥラエフ (З. Г. Абдуллаев) 等。次いで、「能格論の研究に著しい貢献を行ったものとして他の国外の能格論者以上に「ソヴィエトの思潮との接点」が顕著であるフランスの言語学」を挙げる—とりわけレガメ (C. Regamey) とラフォン (R. Lafon)。アメリカ諸語の研究ではグラススリー (R. De la Grasserie)、バスク語研究でのマルティネ (A. Martinet)

の名が挙げられている。

続いて、能格性研究史における具体的な言語資料の果たした役割の特徴に言及している。最も重要な位置を占めるものとして、バスク語、エスキモー・アリュート語、カフカース諸語を挙げ、特にカルトヴェリ諸語を「能格性から主格性へという段階性を見事に証明する」(p.30)資料として重視している。ポリネシア諸語資料、オーストラリア諸語及びアメリカ諸語資料は能格構造の起源を知る上で極めて価値が高く、「北米諸語や一部中米諸語に現れる、能格性の形の著しい多様性、・・・活格構造との密接な関係」の点で重要であるが、アメリカの記述研究はこの点に触れない。一連の印欧諸語－イラン、ダルド、インドの諸言語－は、「能格構文の生成過程の歴史も・・・それに続く衰退の歴史も記録して実証する、という意味で比類なき」(pp.31-32)資料を提供する。特にピレイコ (Jl. A. Пирейко) の名を挙げる：「現代インド・イラン諸語の能格構文には、典型的な能格諸言語に特徴的であるような、形態的形式と統語的構文間の相関関係が認められる」(p.32)。印欧語資料は特に重要である。能格性全体論(総論)の構築を側面的に支えたのが、多数の比較言語学者を惹きつけた印欧語の能格的過去説を巡る諸研究である。印欧語の能格的過去についての推定を初めて述べたのはシューハルトであったが、多少とも完成的な仮説を提示したのはユーレンベックである。すでに周知のように、彼は最古の印欧語の過去にエスキモー語やバスク語にあるような能格と絶対格に類似した僅か二つの格－能動格と受動格－の存在を推定した。その後この仮説は、名詞曲用史の多数の研究でさらに発展を遂げ、共通印欧語の主格 **-s* は無徴 (unmarked) である絶対格に対立する歴史的能格に遡及し、絶対格の方は後に対格の基礎となり、さらに後に *-m/-n* 指標対格があらゆる語幹に一般化した、と主張した。ゲルマン諸語資料を基にしたカツネリソンの名詞研究(態の欠落という動詞構造特徴に関連させた名詞研究)、印欧祖語に他動詞の対象(客体)活用 (objective conjugation) を構想するクレッチマー (P. Kretschmer) の研究とその方向をさらに深めたクノブロフ (J. Knobloch) の研究、そして「印欧語能格性問題の解決に積極的に寄与した」(p.34)アナトリア諸語の研究(ヴァチェスラフ・イヴァノフ)、グフマン (M. M. Гухман) の印欧語与格構文の研究、印欧語の主格化過程問題を提起したデスニツカヤ (A. B. Десницкая) 等が挙げられる。こうして「全体として印欧語の能格的過去説は現在では研究者の中はかなり多数の支持を得ている」(p.34)が、「この仮説の中に取り入れられている事実全体が一層の体系化を必要としており、また特に能格構造諸言語の類型的特点づけに関する現代の知識に照らして批判的に検討する必要がある」(p.34-35)こと、「ここに再建される文モデルの統語的特徴が、他動詞と自動詞の

区別でなく、活格動詞と状態動詞(印欧語学の用語では行為動詞と状態動詞)の区別に基いたものであることから判断して、これは能格構文ではなくて、多くの点で構造的にそれに近似した活格構文と活格構造総体に関するものであるはずである。この場合、印欧祖語の基本文法格は活格と不活格と認定することも正しいことになる」(p.35)。本書の四年後に上梓され『活格構造言語の類型学』(1977)では、印欧語についても積極的に印欧語活格説が展開されていることはすでに周知のところである⁸。

最後に能格性問題検討上の最も大きな弱点について述べられている：第一は、形態主義への傾き。その結果現在でも統語論の面で一貫した能格構文の定義が存在しないこと。第二に、能格性全体論(総論)の中での諸現象の把握、統一的な体系としての認識、の欠落。第三に、能格構造の起源問題への無関心。その結果として、例えば「能格構造と活格構造の混同が日常的である」(p.37)。最後に、研究の用語装置の不統一と言語学者の研究努力の相互分散性を指摘する。

第2章 能格論の基本概念の定義によせて

過去の圧倒的多数の研究では能格構文だけが注視され、能格構文(эргативная конструкция)の定義だけに関心が集中して来た。しかし、能格構文の定義は、相関的な単位としてそれと並行して機能する他の構文なかんずく絶対構文や情緒構文を含めた統一的な文類型全体(целостная типология предложения)の定義の中でこそ行うべきである。文類型の概念を初めて明確に定式化したのはメッシャニーノフである⁹。さらに文類型体系全体との相関性の中で能格構文の定義を行うということになれば、その論理的必然として能格型特徴を持つ言語構造の文脈環境全体の研究、すなわち能格構造総体(эргативный строй языка в целом)という概念の定式化が必要となる。これは能格性の多レベル(語彙、統語、形態面)の包含事象(implication)の大きな集合体全体に関するものである。

この能格構文、能格的文類型、能格構造総体という三つの概念の内、最も狭い概念す

⁸ クリモフ著『活格構造言語の類型学』は、邦訳では「新しい言語類型学—活格構造言語とは何か」(三省堂)と改題。クリモフによる印欧語活格説についての言及は、同書 p.173-178 参照。また、山口巖著『類型学序説』参照。印欧語活格説は、とりわけガムクレリゼ、ヴァチェスラフ・イヴァノフ共著『印欧語と印欧人』(Т. В. Гамкрелидзе, Вяч. Вс. Иванов «Индоевропейский язык и индоевропейцы», I-II, 1984, Изд. Тбилис. университета) で全面的に展開されている。同著は英訳もある (by Johanna Nichols, “Indo-European and Indo-Europeans”, I-II, 1995, Berlin/ New-York, Mouton de Gruyter)。

⁹ cf. ЭКПРЯТ (註 8) pp.7-9 メッシャニーノフ巻頭論文。

なわち能格構文から検討を始めるのが至当である。能格性研究はすでに一世紀以上を経過するが、未だに統語論の観点から一貫した能格構文の定義は存在しない。「能格構文とは、他動詞のもとで主語を能格に、直接補語を主格におくことを特徴とする構文である」、といったタイプの概ね非常に厳密さを欠く定義が支配的である(p.40)。しかし、これらの定義が結局、構文構成上の形態記述に尽きるものであることは容易に気がつく。この点を考慮して以下では、能格構文について、a) 統語論の観点から一貫した定義を定式化する試み、b) 形態特徴の完全な記述、という二点に意を用いる(p.40)。

形態特徴に依拠した特徴づけの典型としてアヴァール語を使ったウスペンスキー (B. A. Успенский) の例を挙げている: МухІамад (Muhamad/ nom) цІалуле-в (read 分詞-в) в-уго (в-is)「ムハマド・読書して・いる」+тІехъ (book/ nom) цІалуле-б (read 分詞-б) б-уго (б-is)「本・読まれて・いる」→能格構文 МухІамад-ица (Muhamad/ erg) тІехъ(book/ nom) цалуле-б (read 分詞-б) б-уго (б-is)「ムハマドが・本・読んで・いる」。この例文について、「能格構文は『共通の V で組み合せても V は変化せず』(一致による変化は考慮しない)、N が格を変える; この点でこそ能格構文は、V が変化する(また N が変化することもある) 主格構文と異なる」(p.41-42)。これは共通の V つまりこの場合合成述語 цІалуле- (readig 分詞) + -уго (be 動詞)をもつ二つの文を一つの文に変換する変形規則のこと¹⁰。

しかし、形態は深層にある能格性の単なる現象化に過ぎない。「能格性全体論(総論)の最も著しい成果の一つは、能格構文が、形態的には本質的に異なる構造によって実現され得る、という事実の認識である」(p.42)。能格性の関係を文のどの成分によって表現するかによって、結局、能格性の関係を動詞述語の語形だけで表す動詞型、動詞述語の構造組織にもそれに関係する名詞成分の構造組織にも表す混合型、この関係を専ら名詞

¹⁰ 共通の V (合成述語) = цІалуле- (分詞) + -уго (連辞動詞)は、第一文では分詞及び連辞動詞は S(ムハマド)の性別に一致して男性 (I 類) マーカー(в) が付加される(分詞には接尾して、連辞動詞には接頭して)。第二文には S がなく、DO (本) = 「主格」= 絶対格に一致して非人間 (動物・無生物等)(III 類)マーカー(б) が分詞と連辞動詞に付される。第二文、第三文とも分詞及び連辞動詞には S ではなく DO に一致したマーカーが付いている (対象活用 objective conjugation)。受動性論者は、この一致を以て能格構文を主格言語の受動構文に比定したのである。ところで、第二文の邦訳は露語訳 «Книга читаема» 「本・読まれている」に従ったが、原義は「(1, 2, 3 人称主語が) 本・読んでいる」であると思われる。クリモフは別の箇所(本書 p.49 参照)で、この種の文を能格主語の省略文と説明しているからである。цІалуле-в と цІалуле-б は類別マーカーの変化であって、動詞基 (分詞) цІалуле- の形そのものの変化ではない、つまり態(voice)の変換ではない(能動分詞、受動分詞の形態的弁別はない)。ウスペンスキーの定式化「能格構文は『共通の V で組合せても V は変化せず N が格を変える (一致による変化は考慮しない)』、ところが主格構文は『V が変化する』」は、以上の点について述べたもの。cf. 註 27

成分によってのみ表す名詞型、という三つの形態タイプに分れる。すでに周知のように、クリモフは、活格性の関係の表現手段においても同じ原則を示しているが¹¹、能格構文についても次のような形態的構造式を提示している(p.43)。

1. 動詞型 $N - N - V_{erg.abs}$
2. 混合型 $N_{erg} - N_{abs} - V_{erg.abs}$
3. 名詞型 $N_{erg} - N_{abs} - V$

これ等形態的変種が同一言語構造組織内で共存するケースが多数見られるが、最大の原因は名詞と人称代名詞とでは語形変化に差があるためである。最も広範囲に行われるのは混合型、最も限られた広がりしか示さないのは名詞型、それ以上の広がりを見せるのは動詞型だという。「混合型形態タイプは、動詞構造中の能格関係の表現が様々な理由で不十分である場合に機能するものだ、と考えるべき根拠がある」(p.44)。これは例えば、動詞形内の能格系列や絶対系列の接辞の対立が混濁して来るからである。概ね、混合型としてバスク語、そしてアプハズ語、カルトヴェリ諸語等を除く圧倒的多数のカフカース諸語、フルリ・ウラルトゥ諸語、シュメール語、多数のインド・イラン諸語、ブルシヤスキ語、幾つかのパプア諸語、多くのオーストラリア諸語、チュクチ・カムチャッカ諸語、エスキモー・アリュート諸語、幾つかの北米諸語等)が、名詞型としてシナ・チベット諸語(孤立型言語の代表である中国語、古典チベット語、ビルマ諸語の幾つかを含む)、オーストラリア諸語、幾つかのインド・イラン諸語、カルトヴェリ諸語の一つチャン語、そしてナフ・ダゲスタン諸語、動詞型としてアプハズ語、アバザ語、エラム語、パプア諸語、圧倒的多数の北米、中米諸語等の名が挙げられている。クリモフが活格言語において例証したように、能格言語においても当然、動詞型→混合型→名詞型の発展過程が想定されよう。ポーランドのアメリカ学者ミレウスキ (T. Milewski) によれば、太平洋沿岸及びその隣接地帯を除いて「残余の全ての北米地域は、白人侵入以前は同心円構造言語であった」(p.45)、つまり動詞基を基軸として全文成分(代名詞的接辞)をそこに引き付けて組み込む動詞型であったという。カフカース学内では、主語と直接補語に格形式が出来上がっていないことを根拠にいわゆる「無規定構文」(indefinite sentence construction) が示されるが、これもまたここにいる動詞型に過ぎない¹²。またヴァンドリエス(J.Vendryès) が与えた「思考代数式」という比喻も、文成分項 (argument) と動詞

¹¹ クリモフ同著 (三省堂) pp.47-50 他。

¹² cf. 『類型学研究』第2号, 2008, p.62

とこのような関数的相関性を言い表したものである¹³。

以上のように、能格性の関係の表現法が言語毎に大きな偏差をもつという事実から、「能格構文の的確な定義が可能なのは、原則的には、深層的統語構造のレベルにおいてのみ、すなわち統語範疇を概念範疇と一定の対応関係におくことができるような抽象的レベルにおいてのみだ、という結論に向わしめる」(p.47)。ただし、ここでいう深層構造とは、言語普遍 (language universal) のいう概念基層とは異なって、「普遍的な意味基層がそれぞれの表層的な実現を直接支配しているのではなく・・・間接的に一様な諸言語に特徴的な深層構造を介して屈折的に一支配している」(p.47)という意味での類型的深層構造である¹⁴。本書の段階でのクリモフの定式化は次のようであった：「深層的・統語的レベルで能格文類型と見なすべきは、他動詞の主体が非他動的行為の主体とは別様に解され、他動的行為の客体が非他動的行為の主体と同様に解されるような類型である(当然、ここで用いる深層的主体と客体の概念は外部から与えられたものであり、それを文の如何なる成分によって表すか、ということとは全く無関係である)。このことから、能格構文とは能格類型の他動詞文モデルであり、絶対構文とは能格類型の自動詞文モデルである、ということになる」(p.48)。「能格構造の主体・客体的な意味的決定因子(またしたがって、能格構造組織が主体・客体関係の伝達に定位していること)が鮮明に見えるような、上に定式化した定義だけが・・・具体的な諸言語での能格構造の様々な実現に対応したものである」(同 p.49)。ただし、本稿筆者が本稿「はじめに」や本研究誌2号で述べたように、クリモフは本書でのこの定義をその後修正、精密化していることに注意しておかなければならない¹⁵。

クリモフの続く記述は、諸言語の実際の中に発現する具体的な様々な文について、第一は省略文のケース、第二はいわゆる能格式構文についての諸例であり、何れも主として二項文における文類型認定の問題である。先ず第一に、省略文ケース。アヴァール語 Рашид-ица б-чана「ラシドが (erg)・追い立てた・(それを)」, бече б-ачана「(私[達], 君[達], 彼[女, 等]が)・子牛を・追い立てた」。これらは能格構文の客体(直接補語)ある

¹³ cf. クリモフ同著 (三省堂) p.49

¹⁴ ここにいう深層構造は、「恐らくビルンバウム (H. Birnbaum) が『類型的深層構造』という用語に込めている意味内容と完全に合致するはずである。・・・諸言語の普遍的な意味基層がその様々な表層の実現を決定づけるのは、直接的ではなく(さもなくば、世界の全ての言語が内容的類型の面で単一類型になってしまうだろう)、間接的に一様な類型の諸言語に特有の深層構造を介して屈折的に一である」(クリモフ同著, 三省堂, pp.134-135; cf. 山口巖同著 p.66)。

¹⁵ 「クリモフ著『内容類型学原理』についての覚書」『類型学研究』第2号, 2008, 類型学研究会, 京都, p.53, 76, 80-81

いは主体(主語)の省略文である¹⁶。ただし、能格構文中の主語を省略できない言語(たとえばパシュトー語)も存在する。また他動詞命令文(チャン語＝ラズ語の例)をもつ二成分構造の認定では、これ等多くの場合に命令文に考えられる主語が曲用せず¹⁷、主体・客体関係の伝達も通常のものである以上、能格構文とも以下にいう能格式構文とも認定し難いという。「深層的な主体と客体の表現の基準を用いる」(p.50)定義も無効であり、以下にいう能格式構文を認定する誘惑に駆られるとはいえ当面準備不足である、と慎重に対処している。第二に、グルジア語 *bawšw-ma i-coc-a*「赤子が(erg)・這い回った」、*deda-m i-ṭir-a*「母が(erg)・泣いた」等の文は能格(-m[al])主語と自動詞述語の二項文であるが、能格構文ではない。この文を認定する時には歴史的な展望が重要であって、その視点から見ればこれは活格構文の名残りである。こうしたケースでは、能格構文か絶対構文かという二者択一的視点では自体の本質は捉えられない。こうした場合に便宜上「能格式構文」という用語を用いる。能格式構文(эргативообразная конструкция)¹⁸とは、能格構文に類似するにも拘らず能格構文ではない、歴史的に活格構文から主格構文に至る過渡的な構文に対して与えられる概念である。すなわち、能格機能の斜格形主語をもつ構文、対象(客体)活用(objective conjugation)しない動詞述語をもつ構文を指す。具体的には、概ね次のような二つのケースである：①自動詞述語に能格主語をもつ二項文(つまり直接補語がない文)ー上例グルジア語例参照。②斜格補語をもつ幾つかの三項能格式構文ーグルジア語 *meḡare-m burt-s mousçro*「ゴールキーパーが(erg)・ボールに(dat)・間に合った(aor/3/sg)」, *gul-ma uyalat̃a ḡac-s*「心が(erg)・背いた(aor/3/sg・人に(dat))。ここではアオリスト時制の統語原則に反して、主語に能格を取るにも拘らず、補語「ボールに」「人に」は能格構文の直接補語に用いるいわゆる「主格」＝絶対格ではなく、与格(間接補語)を用いている¹⁹。

¹⁶ 第一文動詞述語には対象(客体)活用(objective conjugation)の原則によって、Ⅲ類(人間類以外)マーカー(6)が付くが、これに一致(呼応)する客体(補語)＝「主格」＝「それ」は省略されている。主体「ラシド」(能格主語)はⅠ類(男性人間類)であってⅢ類ではないから動詞述語に接頭されるマーカーは省略された成分であることが判る。第二文動詞述語についても同じ。この場合は主体(能格主語)を省略(本稿註10参照)。

¹⁷ 1, 2 人称代名詞が曲用を欠くことは能格言語では珍しくないという(『類型学研究』2号 p.86; Принципы континентальной типологии, 1983, p.130)。

¹⁸ 同用語はエリザレンコヴァ(Т. Я. Елизаренкова)による命名(ЭКСПИЯТ, p.117)。同義でアブドゥラエフ(З. Г. Абдуллаев)は「能格系構文」(эргативоидная конструкция)を用いたという(本書 p.51)。

¹⁹ 現在時制におけるグルジア語与格形は、主格言語の直接補語機能にも間接補語機能にも相当する(対格形がない)：Šota (nom) ḡeril-s (手紙 dat) ḡer-s (書く), Ivane (nom) ḡi (but) ḡign-s (本 dat) ḡitxul-ob-s (読む)「ショタは手紙を書いているが、ジョンは本を読んでいる」(ここで -s は名詞与格語尾；動詞語尾 -s もこの場合は3人称単数主体・現在時制語尾)。

次は、能格構造のもう一つの文類型である絶対構文についてである。ここでも形態的には三つの変種—動詞型、混合型、名詞型—が存在し、次の構造式によって表すことができる：1) $N - (N) - V_{abs}$ 、2) $N_{abs} - (Nobl) - V_{abs}$ 、3) $N_{abs} - (Nobl) - V$ 。絶対構文を主格構文と厳密に区別しない研究が散見されるが、統語面でも形態目録の面でも能格構造と主格構造の間には本質的な違いがあることを先ず確認しておく必要がある、として次のような対比を行っている：①絶対構文では動詞述語が名詞成分に対して支配性を有するのに対し、主格構文では主語名詞成分に支配性がある、支配従属関係が逆であること(主語→述語→直接補語)、②絶対構文では他動詞述語も直接補語も原理的に存在しないのに対して、主格構文ではその両者が完全に共存すること、③絶対構文の語順は $S - O'' - V$ (O'' =間接補語)、主格構文では $S - V (-O - O')$ であること、④文成分の形態形成の特徴面で両者は異なる(前者の絶対格は後者では主格が占め、前者の直接補語の絶対格は後者では対格が占めること)、⑤動詞述語の形態構造にも違いがあること(共通点は主に動詞の主体的活用原理)。

以上の必須二構文の他に情緒構文と所有構文という文類型がある。情緒構文(=与格構文あるいは倒置構文)とは能格類型の情緒文モデルであり、情緒構文を指定するのは *verba sentiendi* (感覚動詞) と *verba affectuum* (情緒動詞) であるが、この二つが幾つかの異なる構文を惹起して構造面で区別される場合もある。所有構文は能格類型の所有文モデルであり、*verba habendi* (所有動詞) の特徴である。情緒構文の例としてアヴァール語 *ვაჟ-აჲ-ე*(兄弟 dat) *ვაც-ას-ი*(息子/I 類 nom) *ვ-ოჲ-ა*(I 類接頭辞-愛する・好きだ)=「兄弟は息子を愛する(兄弟は息子が好きだ)」；*ვაჟ-აჲ-უ*(兄弟 gen) *ლჲ-მერ*(子供 nom III 類) *ბ-უ-ო*(III 類接頭辞-be)=「兄弟には子供がある(兄弟の子供ある)」が挙げられている。また、情緒構文の動詞型はアルゴンキン諸語、パプア諸語で、混合型はカフカース諸語や幾つかの近東諸言語、名詞型はレズギン語、アグル語等に現れるという。情緒構文や所有構文が主格言語でも特別な態様を示すことは周知の所である(グルジア語 *Me Ana mi-qvar-s*, *Me Ana da Eduardi mi-qvar-s*, *Mas Ana u-qvar-s*²⁰; 独 *Mir ist Hannah lieb*, *Mir sind Hannah und Edward lieb*, *Ihm ist Hannah lieb* 等)。

²⁰ *me* (dat) [=nom=erg]「私」, *mat*(dat)「彼ら」は人称代名詞 ; *Ana*(nom); *mi-qvar-s* (1 人称 IDO マーカー—語根「好きだ」—3 人称 S マーカー), *u-qvar-s* (3 人称 IDO マーカー—*qvar-s*)。-s は 3 人称 S(sg) マーカー。mi-, u- はそれぞれ人称代名詞に一致している。すなわち、文法上の主語 (experiencer) は与格、感情を起させる情緒源 (source of emotion) は主格である。ところが、その情緒源は動詞と数による一致を行わないから、「アンナ」の場合も「アンナとエドワード」の場合も -s 語尾は変化していない(H. I. Aronson, *Georgian, A reading grammar*, Slavica publishers, 1990, pp.332-333 より例文引用)。

以上の能格構文、情緒構文、所有構文の三種は、述語による主語と補語の支配、主語の相対的自立性に対する補語の述語への完全従属性の点でも共通の統一的な構造組織図＝能格的文類型に属するものである。能格ではなく与格主語を置くグルジア語完了時制系列の文も、能格的文類型間の一体的相関性の例証の一つである：「全体として形態的に最も能格構文への近似性を示すのは、情緒構文である。情緒構文が能格構文にしばしば混淆 (contamination) することは、この近似性事実の客観的な帰結と見なすべきである。グルジア語やスヴァン語において他動詞結果時制形の場合に機能する能格的文構造(cf. グルジア語 cxeṇ-s(dat) balax-i(nom) mo-u-čam-i-a(perf)「馬が (dat)・草を(nom)・食べたらしい(pres.perf < mo-前綴 -u- [=3/sg/S 指標=IDO 指標] -čam-[語根=eat]-i-a[3DO-bel]);」[конь, оказывается, поел травы])が、カルトヴェリ学では長い間同構文の主語の与格に基いて「与格」構文すなわち情緒構文と解されて来たという事実は、両構文の形式的類似性の主観的な証言である(恐らく、この構文が初めての確な認定を受けるのはようやく 1963 年以後のことである)」(p.57)²¹。能格類型全体の構造的一体性は後にヂャーコノフ (И. М. Дьяконов)、フィルモア (Ch. J. Fillmore)、ライアンズ (J. Lyons) も強調したことである。「動詞述語の側からの、主語及び補語の『支配』と定義し得る文成分の統語的連結の方法や方向性の面で、上述の全ての並列的な構文は、主格構造言語の主格構文にはっきりと対置される。これ等構文にとって基本的文成分の『規範的』な配列構造式も同一である」(p.59)。

最後に、記述は能格言語構造総体という概念の問題に移って行く。これは、上述の専ら統語面に関する能格構文や能格的文類型を含めてそれらに連係する他の言語諸事実—語彙面、統語面、形態面、そして音韻面(時に除外されるが)の諸事象—の集合全体を指す。そこでクリモフは、能格構造総体を構成するこれ等諸事象を包含事象 (implication)—語彙的、統語的、形態的包含事象—と呼んでいる。語彙的包含事象の中で決定的な役割をもつのは動詞語の語彙化原理—「他」動詞類と「自」動詞類の対立—であるが、これが統語的包含事象—両動詞類が構造化する異なる文モデルと文成分目録—を決定し、次いで統

²¹ メッシャニーノフの著書『文の構造』(1963)、また同じく「異類型諸言語における能格構文」(1967)が挙げられている(本書 p.57)。なお、グルジア語の完了時制系列の機能は、英語等の完了形から類推されるのではない。現在完了 (present perfect) の意義は、英訳では must have あるいは apparently (グルジア語 turme)、露訳では оказывается + 動詞過去形(完了/不完了)、すなわち「実は〜であったらしい、〜であったに違いない」の意。アロンソンはこれを過去の行為(結果)の inferred action (推断行為)と解説し、この意義を第一に挙げている(ただし別の意義もある)。また記述文法では、完了時制系列では文法上の主語は与格、直接補語は主格、と解説される (cf. H. I. Aronson, Georgian, A reading grammar, Slavica publishers, 1990, p.274; Л. О. Бателешвили, Учебник грузинского языка, Часть I, Восточная литература РАН, 2007, pp.289-290)。

語を介して形態組織(形態的包含事象)さらにまた音韻組織を構造化する。こうして原理的に語彙→統語→形態→音韻という言語構造体の下降的支配・従属関係が示される。ただし、本書では音韻レベルの包含事象の解明については、若干の言及はあるが、未開拓な面が多いことも認めている(「内容類型学の原理」では、この点で幾ばくかの進展があると思われる²²⁾)。言語構造のこうした統一的な理解に達していた 30-40 年代の学者としてメッシャニーノフを上挙げたが、ここではさらにリフチン (А. П. Рифтин) やカツネリソン (С. Д. Кацнельсон) の名が挙げられている。以上の包含事象に次いで、能格性体系に収まらないにも拘らずそこに多発する随伴(多発)事象 (frequentalia) について指摘される:「能格性の枠内には動機性 (motivation) をもたないけれども、それにも拘らずそれが機能する確率が極めて高い多レベル事象群」(p.61) のことである。言語を形式と内容の弁証法的発展過程の中で捉えるならば、当然、言語は現体系内に前段階の包含事象を引きずり次段階の包含事象を先取りして現象化させる。この前段階の残滓的事象あるいは次段階の先駆け的事象を指して随伴 (多発) 事象という。この意味で勿論、随伴事象は、その発現の程度や態様によって言語の段階的連続性を追跡する上で有効なメルクマールになることは間違いない。

そこで、「具体的諸言語での能格性の程度」(p.63) の問題に移っていく。要するに、能格構造の不徹底な実現、過渡的な状態の問題である。クリモフによれば、能格構文をもつ言語、能格的文類型をもつ言語、能格構造の言語という三つのタイプに分れることが具体例によって確認できるという。例えば「能格性を知る圧倒的多数の現代インド・イラン諸語において能格類型の文が占める位置は、明らかに周辺のものであるが故に(ここでは能格性は完了時制の動詞述語の構文に限られる)、全体としてここでの文類型は能格的文類型と認定することはできない(しかも、これ等諸言語において能格構文と対照をなす絶対構文は幾つかの特徴からして主格構文に近い)」(p.63)。また、その他あらゆる場合に、①能格的文類型が動詞述語の時制系列に左右されず現れる言語(能格構造の圧倒的多数の言語)、②それが時制系列によって左右され、非持続時制系列の動詞述語下でのみ現れる言語、という二基本タイプに分れる。この後者のタイプとしてインド・イラン諸語、また二つのカルトヴェリ諸語(グルジア語とスヴァン語)がある。グルジア語はアオリストでは能格的文類型をとるが、現在時制系列では主格的文類型をとることは周知の所である: kališwil-i (若い娘/nom) brund-eb-a (帰る/pres/3/sg); kališwil-i (nom) cxen-s

²² cf. 例えば、『類型学研究』2号 p.63; Г. А. Климов, «Принципы континентальной типологии», pp.43-45 (具体例が示される)

(馬 dat) a-čmew-s (餌をやる/pres/3/sg)。現在時制で能格構文を指定するのは、二つの同義動詞 *ici-s*, *uçqi-s* 「知っている」だけである (p.65)²³。スヴァン語では結果時制やアオリスト時制系列では、原則として他動詞か自動詞かによってそれぞれ能格構文あるいは絶対構文を指定するが、自動詞述語に能格主語をもつ文もあり、当面何らかの一般化はできない、という。ヴェルネル (B. V. Вернер) の研究によって、ケット語 (エニセイ諸語の一) も、他動詞の客体指標と自動詞の主体指標が一致する限りにおいて能格言語種と見なせるが、この原則が混濁することがあるため、「一貫性を欠く能格構造」言語、「活格構造と主格構造間の直接的あるいは中間段階を示した」言語 (p.66) である²⁴。また情緒構文の場合も、カルトヴェリ諸語も含めて「一貫性を欠く」言語では、現在時制ではその安定性がより高いが、過去時制や未来時制では能格構文をあるいはまた絶対構文を指定することがある、という。一方、能格構文と絶対構文のコントラストが全時制系列で現れる言語は能格的文類型が一貫して実現される言語であり、さらにこの言語が他の構造レベルでも能格的包含事象を示しておれば、一貫した能格構造の言語ということになる。大多数の北米、中米諸語、エスキモー・アリュート諸語、チュクチ・カムチャッカ諸語、パプア諸語、オーストラリア諸語、アブハズ・アディゲ諸語がこれに属するという。インド・イラン諸語は能格性規範が不徹底な言語の例である。能格構造の一貫性の程度に応じて、厳格な境界線を引くことはできないが、概ね能格言語は二つの分布圏—東分布圏と西分布圏—に分けられるとされる。

第3章 共時態における能格構造

「能格的言語構造は、多レベル(語彙、統語、形態、音韻)の相関項の大きな集合として実現されるが、その体系的相関性は特に共時面で鮮明となる」(p.68)。その事象集合には、既述のように、能格構造の本質そのものを構成する包含事象 (implication) と構造的動機性がないにも拘らず多発する随伴(多発)事象 (frequentalia) がある。この内能格構造のメカニズムを特に支配するのは、語彙的包含事象であって、これこそが統語組織や形態組織さらには音韻組織の構造化を決定する。

能格性の語彙的包含事象 ここで「語彙的包含事象に入れることができるのは、行為の他動性～自動性特徴による動詞の語彙化原理だけである」(p.68)。ただし、ここでクリモフが、主格構造言語における他動詞と自動詞という用語と能格構造言語に適用する

²³ cf. 構文法については本稿註 23。また動詞「知っている」については H. I. Aronson 同著 p.244 も。

²⁴ cf. ケット語については、クリモフ同著 (三省堂), pp.191-196 にさらに詳述される。

場合の他動詞と自動詞という用語はホモニムである(pp.68-69)、と断っている点に注意が必要である(特に「内容類型学の原理」における修正に注意²⁵)。また、他動詞は能格構文を、自動詞は絶対構文を指定するという語彙→統語という方向性があるが、何れの構文も許容する可変動詞(*labile verbs*)がここにあることによって逆にこの方向性が明確に裏付けられる。さらに、発達した動詞形態がある言語では、他動詞と自動詞がそれぞれ固有の活用パラダイムを有する。語形成(*word-formation*)面では二つの基本的手法がある：①専用的派生接辞による接辞化手法、②語源的に異なる語基による手法。「全体として①の手法が最も重要な役割を演ずる」(p.70)²⁶、として次のようなアヴァール語の例を挙げる(その一部だけ拾っておく)：

他動詞	自動詞
б-ещи́зе「刈る」	в-ещари́зе「刈取り作業をする」
б-екъи́зе「耕す」	в-екъары́зе「野良仕事をする」

²⁵ クリモフは、『内容類型学の原理』で他動詞と自動詞という用語を *agentive verb* と *factitive verb* という用語に修正している。本稿筆者はこれに対して行為主(作因)動詞と事実主動詞(あるいは叙実動詞)という仮の訳語を当ててきたが、能格動詞と絶対動詞と言い換えるほうが無難であろう。その能格動詞と絶対動詞は次のような意義を有する動詞群である：1) 主体から客体へ広がり及んで客体を改造する行為を表す *agentive verb* 類 cf. 折る・砕く、切る、摘み取る・破り取る、殺す、切る・伐採する、乾かす、捕まえる・捕獲する、耕す、掘る、播種する、焚く、等；2) 主体の状態、ないしは主体の客体に対する影響が表面的であることを伝達する *factitive verb* 類 cf. 育つ・生えている、歩行する、横たわっている、走る、くしゃみをする、(泣き) 叫ぶ、歌う、(跳び) 踊る、押す・突く、打つ・叩く、つねる、引っ掻く、咬み付く、接吻する、引っ張る、待つ、頼む、追いつく、罵る、呼ぶ、等。クリモフは「伝統に圧せられるままに」他動詞と自動詞という用語を使って来たが、能格言語が特徴とする動詞の構造化(語彙化)原理を他動性～自動性特徴による対立とする考えの的確性には重大な疑念を引き起す論証集合が相当多数に上って来ており、「能格諸言語における多数の意味的な他動詞と自動詞の、主格構造組織に比べての本質的に異なった振舞い方は、正に伝統的に形成されて来た考えを克服する立場によってこそ説明できる」ことを強調している。すなわちクリモフが上に挙げた他動詞～自動詞例は次のような問題点を含むのである：①多数の意味的な他動詞が構造的な他動詞ではなく、可変動詞、他動・自動詞、情緒動詞(不随意動詞)、所有動詞という特殊な動詞類に含まれること；②意味的な他動詞がむしろ自動詞と解されていること(例えば、打つ・叩く、突く、つかむ、引っ掻く、つねる、引っ張る；頼む、待つ、呼ぶ、等々上例 *factitive verb* 参照)、同時に、構造的に他動詞を思わせるような意味的自動詞が見受けられること(例えば、走る、泣く、跳ぶ、のような自動詞が能格主語を取る場合のこと—これ等は時に能格式構文と呼ばれる)；③使役動詞が使役対象の名詞を間接補語におくこと。例えば「息子に(間接補語)パンを持って来させる」とすること(主格言語では「息子を(して)～させる」直接補語)。

²⁶ この点の一般化に関しても、後に「内容類型学原理」で修正されていることに注意：「過去に、能格言語の動詞にとって、他動性～自動性は動詞の語彙素自身に表示されるいわゆる『顕在』範疇である(cf. 例えば能格諸言語で他動詞と自動詞の語形の形態構造が区別されること)のに対して、主格言語の動詞にあつては、他動性～自動性は、原則として動詞の語形の範囲を超えて現れる『非顕在』ないしは『潜在』範疇である、という点に類型的な両構造組織の他動詞の違いがあると見ていた。その後、他動性はここではせいぜい一定の形態範疇(例えば人称範疇)の表示との兼務であるから、能格言語の他動詞の形態構造に専用的な他動性表示があることを証する訳には行かないことが明らかになった」(Г. А. Климов, «Принципы...», », p.101；『類型学研究』2号 p.76；クリモフ同著三省堂 p.p.134, 241)。アヴァール語の事実に対する修正ではなかろう。

хъвазе「書く」	хъвадаризе「書き物をする」
чIамизе「噛む」	чIандезе「咀嚼運動をする」
дванкизе「打つ、叩く」	дванкезе「ぶつかる」
в-ачине「連れて行く」	в-ачIине「行く」
чIвазе「殺す」	хвезе「死ぬ」 ²⁷

異なる語基を用いるが、語源的同一性は明確に残り、その区別の基礎には求心形 (illative, centripetal) と遠心形 (elative, centrifugal) の歴史的な対立 (ы〜ə) がある、というアディゲ語の例も挙がっている：他動詞～自動詞 ды-н「縫う」～дэ-н「縫い物をする」；хы-н「刈る」～хэ-н「刈取り作業をする」等々。また、情緒動詞を構成するのは、既述のように、verba sentiendi (見る、聞く、知っている、気に入る[好きだ、愛する]、憎む、等) と verba affectuum (泣く、笑う、覚えている、叱る、等) であり、知覚、感覚、願望、必要性、可能性、愛、等を表す語彙であり、これ等は他の動詞群と異なり与格主語と結合するという特徴をもつ、つまり情緒構文を形成する。そこでチェイフ (W. I. Chafe) によれば、これらの動詞と結合するのは行為主 (動作主 Agens) ではなく経験主 (experiencer) である。これ等の語彙群は、極く稀に 20 語以上に上ることもあるが、多くの場合は数個の動詞に限られ、しかも能格言語の記述文法でこれ等動詞群の完全な目録を掲げるものはほとんど皆無だという。また、上述の二つの情緒動詞を区別してそれぞれに異なる主語格を指定する言語もあり、さらに専用の情緒格(多くのナフ・ダゲスタン諸語)や情緒主体を表す人称接辞を有する言語(いくつかの北米諸語、パプア諸語)があるという。所有動詞 (verba habendi) と考えられるものは、「さらに閉鎖的な語彙素群を形成する」(p.72)。バンヴェニスト (E. Benveniste) は、これが主体と客体間の行為の他動性を表すものではないから他動詞ではないことを強調して擬似他動詞 (pseudo-transitif) と認定し、チェイフもまたこれ等の動詞と結合する名詞は行為主 (Agens) ではなく受益主 (beneficiary) だとする。能格言語で所有関係を表す動詞の態

²⁷ アヴァール語動詞は人称活用を行わず、上例の動詞はどの人称にも対応する。また一部の動詞は類別指標を組み込むが、多くはその類別指標なしにどの類の主体、客体にも対応する。したがって、в-(I 類=男性類), й-(II 類=女性類), б-(III 類=その他), р-(複数) を接頭した動詞は類別指標を付加する動詞の例である。さらに類別指標を接中辞 (infix) として用いる動詞もある。例：自動詞文 Вас (少年) в-ачIана (来た), Яс (少女) й-ачIана, Чу (馬) б-ачIана, лъимал (子供達) р-ачIана; 他動詞文 Яц(姉妹) вас(息子) гъа-в-уна(産んだ), Яц(姉妹) яс(娘) гъа-й-уна(産んだ)... 等では類別指標は直接補語(客体)に一致している (objective conjugation)。また類別指標を組み込まない場合も、現在時制形では同指標が現れることがある：Вас (少年) чед (パン) квана (食べた) に対して Вас (少年) чед (パン) куне-б б-уго (食べる→分詞+be の合成述語で分詞にも be 動詞にも類別指標: obj. conjugat.)。

様は様々であり、ここでは原則として存在動詞が主格言語の所有関係表現を担うにすぎない。バスク語の所有動詞の基底にも本質的には存在動詞がある(d-u-ø「それーもつー彼が」< d-a「それーある」)、と解すべきであり、同様の状況はブルジャスキ語、オーストラリア諸語でもまたアルゴンキン語族語オジブワ語もまた同じである。さらに、能格諸語とりわけ一連のオーストラリア諸語では、存在動詞に代えて「立っている」「座っている」「横たわっている」の動詞基を使い、専用の所有動詞が機能することは極めて稀である、という。「所有動詞の役割を以て任ずる」アプハズ語 амаза²⁸、アディグ語、カバルダ語 иІән の「もつ」も、デュメジル (G. Dumézil) はそれが倒置構文を構成することに立脚して「～にある」の意だと「見なす方へ傾いている」という(p.73)。グルジア語 qola「もつ(有生対象を)」, kona「もつ(無生対象を)」は情緒構文と形式的に一致する文モデルを形成する²⁹。「能格構文を知る言語の中で専用の他動詞『もつ』を示すことができるのは、恐らく一連のインド・イラン諸語だけであろう」(p.73)。

能格性の統語的包含事象 能格構造メカニズムの統語面では、先ず文成分目録を如何に記述するか、という点で研究者間の見解は多様である。主格言語の研究で伝統的に用いている文成分たる主語や直接補語等という概念を構造が異なる能格言語に適用した場合に起る幾つかの困難性を克服するために、例えば Agens と Patiens、actor と goal、行為主体と行為客体等の様々な概念装置が提起されてきた。しかし、提起されたこうした文成分目録が既成の伝統的なそれと比べてよりの確だとはいえない。そのため、伝統とは異なる、にも拘らず言語学本来の用語法を能格論のために構築して行こうとする試みも現れている。例えばヴァイアン (A. Vaillant) は主語という概念は絶対構文に用い、能格構文や情緒構文には pseudo-sujet (擬似主語) を当てる、あるいはまたマルティネのように彼の能格構文一肢文説(つまり無主語文説)に合せて同構文の二つの名詞成分を complément à l'égargatif (能格補語) と complément sans marque formelle (無形補

²⁸ амазаара (cf. Tamio Yanagisawa, Analytic Dictionary of ABKHAZ, Hituzi Shobo Publishing, pp.249-250)

²⁹ qola, kona はマスダル(動名詞)の形。活用はそれぞれ次の通り：例 me (私) m-qav-s (m-語根/もつ-s) megobari (友達) / me (私) m-akv-s (もつ) puli (お金) ; šen (君) g-qav-s / šen (君) g-akv-s ; mas (彼、彼女) h-qav-s / mas akv-s ; čven (我々) gv-qav-s / gv-akv-s ; tkven (君達) g-qav-t / -akv-t ; mat (彼ら) h-qav-t / akv-t。語根前に付く m- (1/sg), g- (2/sg), gv- (1/pl), g- (2/pl), h-, ø- (3/sg, pl) は客体マーカー。2, 3 人称複数形ではさらに語尾 -t が付いている。語尾の -s は3人称単数主体マーカー。したがって、情緒構文と同じ構文化が行われ、「もつ」ではなく、「私には友達がある」、「私にはお金がある」が原義。所有対象が複数でも、動詞は数の一致をしない： me bevri (沢山の) nasnobi (知人) m-qav-s / me bevri sakme (仕事) m-akv-s (cf. 註 20)。(Башелешвили, Учебник..., 同著: Г. И. Цибашвили, Самоучитель грузинского языка, Изд.Тбилис. ун-та, 1978 より例文引用)

語)と見なす試みである³⁰。ヂャーコノフやリフチンの場合は、主語や直接補語ではなく行為主体と状態主体(これは能格構文中の直接補語に代るものとしても)という単位を認定する、という具合である。しかし、クリモフは、「これらを論者達は形態基準に基いて提起している」(p.77)、と批判している。そこで、この問題の難しさを克服するには二つの方向が可能である：①主語、直接補語等の概念の利用を止め、それらを別の用語法に換える、②伝統的統語論から継承した二つの概念の外延を拡げる(例えば主語という概念に、斜格形あるいは専用の能格形の名詞成分を含める)。そしてメッシュャニーノフやソヴィエト期の多くの研究者(カツネリソン、プイホフスカヤ、ヤーコヴレフ、A・ボカリョフ、E・ボカリョフ、ピレイコ他)は、この第二の方向を選択している。すなわち、伝統的用語法を特に複雑化せず、それを基礎としつつその外延を広げかつ精密化していくという方向性のメリットを主張するのである(→cf.現代ロシアの類型論³¹)。多数の言語

³⁰ cf. 金谷武洋氏の最近の一連の日本語論(例えば『日本語に主語はいらない』講談社選書メチエ、2002, pp.57-58)等。また、マルティネの一文説については、本書(原著)p.88も。

³¹ 現在活躍中のロシアの言語学者キブリクは、クリモフらソヴィエト言語学が採ってきた方向を転換させ、クリモフがここでいう第一の方向を採っている。例えば次のような主張である：「関係文法では主語と補語が統語的素因子(syntactic primitive)であるが、これ等概念の適用の複雑さを周知する者には受容できない。明らかに普遍的アプローチの枠内で然るべき定義を探るべきである」、「言語モデル構築の原点として提起するのは、アプリオリに仮定されるあれこれの形式的諸構造を列挙することではなく、どんな自然言語の形式的構造にも具現さるべき、そしてまた『基礎的統語構造』(basic syntactical structure)の組立てを支配する規則の『糸口』になるような、普遍的な意味的本質に問いかけることである。このことに関連して必要なことは、意味的表象(семантическое представление[semantic imaging])の構造に問いかけて、その構造中で最も重要な構成(成分/層/分野)を抜き出すことである」。その「意味的表象」とは、場の要素(例 Agens と Patines 等)、直示的要素、情報伝達の(コミュニケーション)要素(例 テーマ・レーマ等)、指示的(referential)要素、モーダルな要素、論理的要素、情緒的要素、意図的、発話内行為的(intentional, illocutionary)要素である、すなわち文成分に絡まるあらゆる意味・機能的な要素を含意した文成分の決定である。場の最も重要な「普遍的」意味役割をもつ項(argument)は Agens と Patiens であり、この A, P の組合せによって理論的には15通りの類型技法(strategy)が考えられるが、現実の言語に存在するのは五技法—対格技法、能格技法、活格技法、対照(三分)技法、中立技法—だけである。また A, P という基礎的な標準的役割タイプと並行して hyperroles (гиперроли)ともいべき役割分野—「一定の動機性を以て集った基礎的役割の複合体(conglomeration)であって、その複合体は一括化された意義をもつ一体的役割として融合し合っている—がある」。どの技法にも hyperrole はあるが、能格構造でのこの種の hyperrole は Factitive 機能である。したがって、能格構造は Agentive~Factitive という意味役割項から構成される。能格言語と言われるものは実は多様であって、この理論的枠組みから見れば、一体的な能格構造という概念は実際の言語資料の検証に堪え得ない。これがキブリク類型論の構想である(A. E. Кибрик, Очерки по общим и прикладным вопросам языкознания, Изд. Мос. Ун-та, 1992, pp.182, 184-186 他; 同 Константы и переменны, Аллегейя, 2003, 第7, 8章, 例えば pp.118-125)。言語の発達につれて、したがって主格言語にして初めて、意味役割的な場の要素に加えて語用的な、情報伝達的な要素を融合的に構造化しようとする、という趣旨の「言語学の諸問題」(ВЯ)1995/ No.5のイェルモラーエヴァ論文「主格構造の意味的決定因子に関する問題によせて」にも、こうした類型論の研究成果を取り込もうとする意図が感じられる。同論文の趣旨には本稿筆者も肯ずる面はある。しかし、本稿筆者には、ロシアの現在の言語学潮流は弁証法を破棄して大きく機能主義の方向に舵を切りつつあるか

が能格的文類型から主格的文類型への過渡的な文類型に属するのであるから、「競合する概念たる主語と *Agens* (行為主)、また直接補語と *Patiens* (被行為主) の概念の実際の外延はそれら諸言語間で一定程度近接しており、この方向の方がはるかに便利である」(p.77)。便利さという以外に充分な構造的根拠(以下の形式的・文法的諸特徴①②③)も存在する。そこで、文の主成分と二次成分について次のようにいう。先ず述語についていえば、それは文法的に他の文成分に依存しない自立的な成分で、普通は動詞によって表される文の主成分と定義できる。一方、主語は文の第二の構造的な中心を成し、普通は名詞あるいは代名詞によって表される文の主成分である。また能格類型の述語の定義は、文を構成するその役割が明白であるため見解の相違を生むことはない。絶対構文中の主語の決定も困難はない。問題は、それ以外の文モデルでの主語である。上述のように、述語と統語的に関係する名詞(行為主体の名詞と行為客体の名詞)の何れを能格構文の主語と見るか、ということで過去には受動性論者と中立性論者の間の議論になったのであるが、現在では多少とも一様な解決を見ている。「能格類型の任意の文における名詞の一つを主語に関係付けるための唯一関与的な基準と認定すべきは、文の第二の(述語に次いで)構文的中心としてのその役割である。形式的・文法的諸特徴の集合全体が、能格構造諸言語では『他動詞が表す行為主体を指示する文成分を、また少なくとも能格構文をもつ大多数の言語で斜格の一たる名詞で現れる文成分を、主語にする傾向』(パンフィーロフ В.З.Панфилов) が起ることを、かなりはっきりと示している」(p.79)。ここにいう形式的・文法的諸特徴の集合とは、①文における語の線条的な関係、②文の音調的輪郭線、③語の形態的形式化のことである。すなわち、①主語と述語の相関性の点では、両者は最大限離れた位置関係(主語は最も左位置、述語は最も右位置)を示す。その典型例として、主語と述語間に長い二次成分が割り込んで両者が切り離されるダルギン語例が挙げられている(省略)。この場合、主語はそれに関係する二次成分を率いて主語グループを形成し、一方、述語は能格構文中の直接補語と、また情緒構文、所有構文中の間接補語と密接に結んで、両者は密着配置される。これはこれ等補語が述語に統語的に従属することの証左である、つまり述語と補語は述語グループを形成する。同時に、この主語、述語グループは文全体の構造的骨組み—述語的シンタグマーを形成する。②主語の自立性を示すもう一つの指標は、主語(グループ)と述語(グループ)の間に引かれる特徴的な韻律・音調的な輪郭境界線の存在である。③主語の自立性の高さ、直接補語の述語への

統語的従属度の高さは、主語と直接補語の形態形成にも反映される。すなわち発達した名詞形態をもつ能格言語において、主語は独自の徴表 (mark) をもつのに対して、直接補語は「ほとんど常に無徴 (unmarked) である」(p.80)。

直接補語は、能格言語の文成分目録の特徴づけにとって重要かつ必須のものである。直接補語と間接補語の対立は、他動詞と自動詞の統語的対立は勿論、形態的対立とりわけ語彙的対立に起因するものである。この直接補語の存在によって、能格構文は絶対構文に対立する。情緒構文や所有構文中の補語の特徴づけは、もう少し複雑である。例えばアヴァール語：兄弟 (вацас-е/ dat)・子供 (лъимер/Ⅲ類名詞 nom)・好きだ (Ⅲ類マーカー-б-окъула)＝「兄弟は子供が好きだ(兄弟は子供を愛する)」；兄弟 (васас-ул/gen)・息子(вас /Ⅰ類 nom)・ある(Ⅰ類マーカー-в-уго)＝「兄弟(に)は(兄弟の) 息子があある(兄弟は息子をもち)」³²。クリモフはこれについて次のように述べる：「他動詞～自動詞特徴による二項対立の図式に収まらない情緒動詞や所有動詞の独自の性格は、この補語をおおよそのところ間接補語と認定せしめる。何れにしろ、このように理解すれば、『私(ди-да/ loc 1 系列)³³・馬 (чү/ Ⅲ類/nom)・見る(Ⅲ類マーカー-б-нхъкула)』＝「私 (に)は馬が見える (私が馬を見る)」型の構文は、能格構文ではなく正に情緒構文であると定義する可能性が出てくる。同時に、情緒構文と所有構文の中に登場する間接補語の種類を内的に区別する幾つかの基準がありそうだ」(p.81)。

次は、文成分目録の認定における「形態主義」批判である。動詞述語の形態構造には直接補語を「反映する、反復再現する」(отражать[reflect])、つまり動詞構造中に文中の項(文成分)の代理要素を埋め込む (マークする) ことがしばしば見られる(cf. アブハズ語 и-с-фойтI「それを一私が一食べる」等々すでに上例の幾つかに現れている)。この事実から、カフカース学では一時期直接補語を文の第三主成分と見なす能格文三肢性説が広がり、教科書等にまで影響が及んだという³⁴。またグルジア語の文法家の中には、間接補語の一種まで主成分の中に入れる者があるという。間接補語マーカー (-m-) が動詞述語中にも組み込まれるからである：cf. ma-n (彼 erg) mo-m-c-a(与えた aor/3/sg) igi (それ

³² 動詞述語に接頭される類別マーカーは、Ⅰ類 в-, Ⅲ類 6-。

³³ loc=locative (所格)。アヴァール語所格には 1～5 系列があり、1 系列の場合は事物の表面に関わる存在、行為等を表す(「～で、～に」、「～へ」、「～から」、「～を通して」)。ただし、所格 1 系列は非空間的な意でも用いられ、感覚・知覚動詞の主体を表すこともある(М. Е. Адексеев, Б. М. Атаев, Аварский язык, Academia, 1997, p.49; Б.М.Атаев, Самоучитель аварского языка, РАН, Дагестан.науч.центр, Институт языка и лит. И искус. Им. Г. Цадасы, 1996, p.33)。

³⁴ 例えばグルジア語は直接補語マーカーを動詞語に組み込む：*mo-v-g-kl-av > mo-g-kl-av 「私がお前を殺す(fut)」(v-g の連続で v が落ちる)。mo=preverb (現在時制ではこれを落とす)、-v=1 人称主体、-g=2 人称客体、-kl=語根「殺す」、-av=Present/Future stem formant。

nom) me (私に) = 「彼が私にそれを与えた」³⁵。これらは典型的な形態主義であり、言語構造における階層的依存関係(語彙→統語→形態)の原則や形態タイプ(動詞型、混合型、名詞型)という変種の存在を無視した認識ということになる。文成分の結合方法の性格を巡っても、形態主義が顔を覗かせる。語結合における支配・従属の関係が一方向的な関係でなく双方向的な関係であると見なす観点である。例えば次のバスク語 Ni-k (私 erg) ura-ø (水 nom=abs) da-kar-t (客体マーカー・運ぶ・主体マーカー) = 「私が水を運んで来る」では、動詞述語が主語を能格に、直接補語を主格(絶対格)におくことを決定付ける(動詞述語が主語と直接補語を支配する)が、同時に、動詞述語形は、主語と直接補語からの動詞述語への支配の指標(客体指標 d-と主体指標-t)を組み込む(主語、補語の名詞成分が動詞述語を支配する)。つまり双方向的支配・従属関係が成立する、という観点である。しかし、これは混合型形態タイプの例にすぎない。この観点を許せば、動詞型では主語と補語の側からの動詞支配、また名詞型では動詞の側からの両名詞成分支配ということになってしまう、とクリモフは批判している。その上で、「主語と述語の呼応的結合関係(координативная связь)がはっきりと感じられるのに対して、直接補語は全てのことから判断して述語に対して完全に従属的な(подчиненный)地位にあるという特徴をもつ」(p.85)³⁶。能格構文における述語と直接補語間の支配・従属的結合関係、「有機的一体性」を示すものとして、①直接補語が動詞密着位置をとること、すなわち OV 語順あるいは典型的には抱合形式をとること：古代グルジア語例 ara (否定辞) ḡac-ḡla (人・殺せ；cf. ḡac-i 「人」を抱合) = 「人を殺すな」、②直接補語の絶対格の無徴性、③直接補語＋述語の一体化した音調の輪郭線が存在、が挙げられる。また絶対構文における主語の絶対格の無徴性も、動詞述語の主体活用の事実と共に両者の密接な一体性を示す。ただし、絶対構文の主語と能格構文の直接補語の「同一形式化という点に的を絞ることは、文成分の統語問題の解決における形態主義の表れである」(p.87)。両者を特

³⁵ mo-m-c-a (aor/3/sg) < 不規則動詞 mi-cem-a (マスダル)。語根「与える」は主語の人称によって変る：1, 2 人称では-ec-, 3 人称では-c-。動詞前綴 (preverb) も、1, 2 人称では mo-, 3 人称では mi- になる。-m=1/sg/IDO マーカー；-a=3/sg/aor 語尾。3 人称 DO マーカー「それを」はゼロ。mo-gv-c-a 「彼が(-a)我々に(-gv-)与えた」、mo-g-c-a 「彼が(-a)あなたに(-g-)与えた」、mo-g-rec-i 「私が(-i)あなたに(-g-)与えた」、mo-g-rec-i-t 「私達が(-i-t)あなたに(-g-)与えた」等々。(H. I. Aronson 同著 pp.176-177)。

³⁶ 「呼応」と訳したが、ロシア語 координация (koordinacija 呼応)という用語は音の面では coordination に相当し、ここからの借用語であろうが、「等位」(coordination)を表す訳ではなく、特に主語と述語の呼応(一致)を表し、согласование (sograsovanie 一致)＝支配・従属の結語関係、例えば形容詞と名詞の結合等と区別される。「koordinacija は sograsovanie と違って、文法的に一体化した単位の相対的な自立性を強調する」(Т. В. Матвеева, Полный словарь лингвистических терминов, Феникс, 2010)。

殊な同一文成分―「状態の主体」―と見なすべきでない。

続いて、能格類型の文のシンタグマ区分の問題。能格、情緒、所有構文の最小限の成分構成には二つのシンタグマ(語結合)が存在し、絶対構文では一つのシンタグマが存在する。それは動詞述語と統語的結合関係を結ぶ名詞成分―主語と直接補語あるいは間接補語―の数によって決定できる。かつてトルベツコイは、能格構文について二つのシンタグマ―述語的シンタグマ(*syntagme prédicatif*)と限定的シンタグマ(*syntagme déterminatif*)―を挙げ、そのシンタグマの態様によって二つのタイプの言語を区別した。すなわち「行為主の名詞が他動詞の限定語となる言語」では主格は能格に対立し、「行為客体の名詞がその限定語となる言語」では主格は対格に対立する、とした。すなわち次のようになる：

述語的シンタグマ：主語　＋　動詞

限定的シンタグマ：動詞(被限定項)　＋　客体あるいは行為主(限定項)

これについてのクリモフのコメント：「トルベツコイが能格構文における他動詞の受動性説を採っていたこと(したがって、実際上の直接補語を他動詞の主語と見なしていたこと)、また限定的シンタグマなる概念はここでは客体的シンタグマ (*объектная синтагма* [*objective syntagm*]) ないしは補完(補語)的シンタグマ (*комплетивная синтагма* [*completive syntagm*]) というもつと的確な概念によって置き換えるべきであること、に注意を向けるならば、上に引いた見解は、述語的シンタグマ (*предикативная синтагма* [*predicative syntagm*]) と補完的シンタグマは互いに場所が入れ替るべきである、という点で定式化しなおさなければならない。メッシュャニーノフは正にこのようなやり方で能格構文のシンタグマ構成を考えたのであろうが、彼はそこに二つの統語群―彼の用語法では述語群 (主語＋述語) と客体群 (述語＋直接補語)―を見たのであった。・・・能格、情緒、所有構文の最小限モデルを構成する二つのシンタグマは、能格類型の文に存在する二つのタイプの統語関係の反映である。種々タイプの諸言語における主語と述語の間に存在する述語的な関係が文の統語的基盤を形成するのに対して、客体(補完)的關係は、能格構造言語では述語グループ内部の關係に相当する二次的なレベルの關係である」(p.91-92)。「同時に、絶対構文の最小限シンタグマ構造は、単一の述語的シンタグマとなる。文に間接補語がある場合は、その中に補完的シンタグマが含まれる」(p.92)。

能格言語の文類型における語順問題。当然語順は上記の文成分の統語的結合態様を反映したものである。先ず、多少とも発達した形態構造がある環境では語順に厳しい制限

がある訳ではなく、したがって様々な話題化 (topicalization) が可能であること、この一般的な原則は動詞型、混合型、名詞型何れでも同じである。文体的に中立的なしたがって類型学的に優勢な語順の一般原則は、能格構文 $S-(O)-O-V_{trans}$ 、絶対構文 $S-(O)-V_{trans}$ のように表すことができる。情緒構文、所有構文の語順については、そこに直接補語がないこと以外は能格構文の語順式と同じである： $S-O-V_{affect}$ ； $S-O-V_{poss}$ 。すなわちやはり SOV 語順である。同時に、能格構文の文成分の語順は、動詞語形内の主体・客体接辞指標の配置順と一致せず、原則として客体接辞は主体接辞に先行する：例 アプハズ語 $Həm\dot{x}^{w}arasa\ ph^{w}əs\ d-aa-i-gej\dot{x}$ = «Хымкуараса жену привел» 「フィムクアラサが・妻を・連れて来た」($d-$ = 直接補語指標； $i-$ = 主語指標)。語順問題に関連して、発話の話題化(いわゆるテーマの選択)の問題については、文中での語順変換によって達成する「二次的話題化」(secondary topicalization) は至る所で可能であるが、能格言語では態 (voice) の対立が欠落しているから、いわゆる「一次的話題化」(primary topicalization) つまり主語化 (subjectivization) は不可能である。二次的話題化の例証として露語訳と共にラーク語が挙げられている：「少年・足・折った」－「足・折った・少年」－「折った・足・少年」。

能格的文類型が機能する範囲について。これが全ての時制形に広がる言語と非持続的な過去時制に限って現れる言語があるが、当然後者は能格性事象が不徹底に現れる言語である(例えば、能格的文類型はカルトヴェリ諸語ではアオリスト系列の動詞述語に最も鮮明に現れ、結果系列の動詞述語では幾分不鮮明になる。現在時制は主格構文である)。能格的文類型と非持続的過去時制との連関について、レガメの考えが紹介されている：「この連関は偶然ではない。主体相と客体相の意味的性格に起因するものである。他動的行為を *Patiens* との関係で見れば、我々が確認するのはこの行為の完了した結果である。この行為は行為主をすでに離れて *Patiens* に移ってしまっている。逆に未だ完了せず実現過程にある未完了行為 (*l'action imperfective*) は *Patiens* よりもむしろ *Agens* を引き立てる」(p.96)。カツネリソンも「これ等の時制形に特有の完了性や結果性の意義が重要な役割を演じた可能性がある」(p.96)と指摘している。情緒構文も、現在時制系列の動詞形でより安定性を見せる。

能格性の形態的包含事象 能格的文類型の形態的相関要素が極めて多数、多様に及ぶことは、能格性の関係がいわゆる孤立型言語においてさえ見られること、また動詞型、混合型、名詞型何れの言語にも現れるという事実からしてすでに自明のことである。全体的な特徴として、先ず、①他動詞と自動詞では形態構造の違いがあること(ただし、名

詞型言語ではこの違いは現れない)、②他動詞に態 (voice) の形態範疇が存在しないこと、③曲用パラダイムに独特の位置格—能格と絶対格—の対立があること(勿論、動詞型言語ではこの位置格の形態は欠落)、を挙げる。

動詞の形態構造。他動詞は名詞曲用がある場合には主語と直接補語の格の形を「支配」する。同時に動詞形態が発達している場合には、これ等の名詞に対する「代名詞的支配」組織—動詞に組み込まれ主体と客体を指示する接辞系列の組織—がある。客体支配(直接補語に対する「支配」)と主体・客体支配(直接補語と主語に対する「支配」)の二タイプがあるが、前者(客体活用)の言語は少数派であり(ナフ・ダゲスタン諸語等)、後者(主体・客体活用)の言語が多数派である(アブハズ・アディゲ諸語、カルトヴェリ諸語、北米諸語等)。絶対構文における自動詞の場合も主語及び間接補語の格形を「支配」する。自動詞が活用する場合、圧倒的多数の言語は純主体活用であるが、極く少数の言語(カルトヴェリ諸語、アブハズ・アディゲ諸語)は主体・客体活用を行う(つまり間接補語も「支配」する)。また、この接辞系列を接頭辞化する言語と接頭辞・接尾辞化する言語があり、純粋に接尾辞化だけの言語は極めて稀である。

以上から、他動詞の形態構造には二系列の人称接辞があり、これは機能的には名詞曲用組織における能格と絶対格に相等する接辞であるから能格系列接辞(erg)と絶対格系列接辞(abs)である(一般的に行われている用語法では、主体系列と客体系列)。二重人称あるいは多重人称活用の他動詞では両系列の接辞が同時に現れ(アブハズ語 и-л-фонт「それ(事物類)・彼女(女性類)・食べる」)、単人称活用他動詞では直接補語に相関する絶対格系列接辞のみが現れる(アヴァール語 б-екана「それ(Ⅲ類=事物類)・壊した」)³⁷。パプアのカヌム語の接辞系列表が挙げられている(p.100) :

	sg/abs 系列	sg/erg 系列	pl/abs 系列	pl/erg 系列
1 人称	-nggo	-nggai	-ni	-ninta
2 人称	-mpo	-mpai	-mpu	-mpunta
3 人称	-pi	-péèngku	-pi	-pinta

ただし、このタイプはむしろ少数派であって、大多数の言語ではこうした完全組織はない。例えば北米ツィムシアン語では、3 人称で両系列の対立はないのに対して、1, 2 人称では能格系列接辞は接頭辞として、絶対格系列接辞は接尾辞として表徴するとい

³⁷ ただしクリモフがここに挙げた例は能格構文の場合である。アヴァール語の б-екана(b-ekana)はいわゆる可変動詞であり、絶対構文の自動詞としても機能する場合は「壊れた」の意：能格構文 vacas (兄弟 erg) istakan (コップⅢ類 abs) b-ekana (Ⅲ類指標 b-壊した)；絶対構文 istakan (コップ abs) b-ekana (壊れた)。cf. 山口巖『類型学序説』 p.71 ; Г. А. К. лимов, Принципы ..., p.100

う。さらに、一般に客体接辞は主体接辞に前置するという接辞配列原則について、また接頭辞とそれに呼応する名詞成分の語順は互いに鏡像呼応 (mirror concord) か蛙飛び呼応 (leapfrog concord) の二タイプであることを指摘する。

クリモフは本書の段階では、能格構文の主語は動詞述語内の能格系列接辞に相關する名詞、一方直接補語は絶対格系列接辞に相關する名詞と定義できると述べるが(p.101)、その後の『内容類型学の原理』(1983)の段階では、本稿「はじめに」や本研究誌2号に述べたように、能格性原理の再検討の結果としてこの定式化を精密化して能格系列接辞は能格動詞の主体(主語)と「間接」客体(補語)に相關し、絶対格系列は絶対動詞の主体(主語)、能格動詞の「直接」客体(補語)に相關するとした上で上掲のカヌム語の接辞系列表を挙げていることにも注意が必要である³⁸。

情緒動詞の形態構造においても、二系列の人称接辞が対立する。ブルームフィールドとミレウスキを参照しつつ、「この場合注意を引くのは、この動詞類に特徴的な主体・客体構成の倒置 (inversion) であり(アメリカの記述研究では、情緒動詞は主体・客体指標の倒置を特徴とする特殊な他動詞範疇と見なされる)、それはこの動詞の絶対格系列の接辞が主語の名詞に、能格系列の接辞は間接補語の名詞に相關する点に現れる」(p.102)というアルゴンキン語族オジブワ語の情緒構文—ne-nōntuw-ā「私に・聞える・彼が」(I hear him); ke-nōntuw-ā「君に・聞える・彼が」(You hear him)—を、その他動詞構文—ke-nōntō-n「君を・聴く・私が」(I listen to you)—と対照している³⁹。

自動詞の形態構造。他動詞の語形中で直接補語を指示する絶対格系列は、自動詞の語形では主語を指示することは周知の所である：アブハズ語他動詞形 i-s-lag-wajt「それ・私・粉にする」；自動詞形 i-lag-wajt「それ・粉になる」。能格構造言語のこのような格の機能的重なり(クリモフはこれを機能的「拡散性」と呼ぶ)の理由を共時的な深層構造とやらに求める誘惑に駆られて、実はこれは「状態主体」なる機能を共有するものと説明する者があるが、「形態形成の同一性は、この構造の動詞に主体と客体というよりはむしろ場の活性的な行為項と不活性的な行為項を表示する活格構造組織にこそその通時的説明を見出す」(p.103)ことを解き明かしている。

接辞系列に関する問題では、「主体+客体」複合指標(「私が+彼を」等)をもつケース(例えばオーストラリア諸語、北米、中米諸語)があること、これが絶対格系列と能格系

³⁸ Г. А. Климов, Принципы континентальной типологии, Наука, 1983 (Либроком, 2009), pp.102-103; cf.「クリモフ著『内容類型学の原理』についての覚書」—『類型学研究』2号, 2005

³⁹ cf. 山口巖『類型学序説』pp.66-67

列の二つの隣接接辞の融合から生成されて来た可能性があることについても言及している。さらに、動詞の直接補語、間接補語に対する「支配」は人称範疇の面で実行されるのが最も一般的であるが、数の範疇、類の範疇でも一致・呼応するケースは、既述諸例(例えばアヴァール語例)にも見られる他、ここでは次例が挙げられる：パシュトゥ語 *kitāb mi lwast* 「本(男性類)・私・読んだ」；*tīāi mi lwast-ala* 「メモ(女性類)・私・読んだ」。

態(voice)の問題。能格構造から主格構造への過渡的な中間的構造ではともかく、圧倒的多数の能格言語で他動詞に態の対立が欠如している。これは、能格言語が「伝達される場の共演項(Aktant)である主体と客体の何れか一方の視点を形態構造に写し取る可能性がないことを意味している」(p.104)。勿論、態とは異なる意味でのディアテシス(相)があり得るが、それは他動詞(能格動詞)ではなく可変動詞(labile v. 拡散動詞 diffused v.)に現れるもので、「このディアテシスは行為の他動性～自動性特徴による対立つまり非態的な性格」(p.104)の対立を示すものである。一連の記述文法に見られる能格言語における『受動態』は、この用語に原理的に異質の概念を含意したものと解すべきであって、それは、ある場合には可変動詞内の対立項としての自動詞、またある場合には状態受動動詞として現象化するもののことである(しかもこれらは活格言語の活格動詞と状態動詞の残滓であろう)。したがって、いわゆる受動性説の誤りを証明する第一の根拠はこの「態」(voice)の欠如である。第二に、能格構文の二つの名詞成分能格と絶対格を具格と主格に見立てる根拠となった動詞述語の絶対格＝「主格」名詞との一致、いわゆる客体呼応(一致)(objective conjugation 対象活用)も常に起るとは限らない。第三に、主格構造言語における受動構文は能動構文からの派生構文であるから両者は同一の深層構造をもつが、能格構文は何らかの派生構文ではなく、「統語的に基点」(p.105)そのものである。クリモフはいう：「能格構文は、その統語単位(文成分)がメンタルな単位に即しており・・・文成分間の関係は言語外の場の諸要素間の現実関係を『図像的に』(iconically)具現化する」(p.105)。第四に、態範疇が存在するとされる言語(カルトヴェリ諸語、インド・イラン諸語)でも態が一定の時制系列に限られるということ自体が受動態の存在に疑念を抱かせる：グルジア語アオリスト形 *ga-a-ḱet-a*「彼は(それを)した」と *ga-a-ḱet-d-a*「彼はなつた」は能動対受動のように対置されるが、これ等の意味は共に能動である⁴⁰。またパス

⁴⁰ グルジア語は概ねⅠ活用は他動詞、そのⅠ活用他動詞の意味に相関する自動詞がⅡ活用動詞であるが、それは機能的に受動の意味に相当する場合も起動(inceptives, inchoatives)の意味になることもある。すなわちⅡ活用は受動機能の専用形ではない(恐らく中動化→受動化)。クリモフが挙げた上例はⅠ活用(*ga-a-ḱet-eb-s*)とⅡ活用(*ga-ḱet-d-eb-a*)現在形をアオリストにした場合の相関性を示している。cf. Ⅰ活用 *ḡer-s*「彼はそれを書く」ーⅡ活用 *i-ḡer-eb-a*「それは書かれる」。// インパー

ク語 *da-kar-t* 「それ・運ぶ・私」の意味も *je le porte* であって *il est porté par moi* ではないことはバスク人自身が認めている、というシューハルトの研究が紹介されている。第五に、語順の点でも主格言語の受動文は SVO であり、一方、受動性論者に従えば能格言語の「受動文」は OVS ということになるだろうが、能格構文の実際の語順は SOV である。このように能格構文は能動構文であり、受動構文を派生させないけれども、次のような構造式の受動変形の類似形式は見られる： N_1VN_2 (erg) $\Rightarrow$ $N_2V_2(N_1)$ 。これは可変動詞がつくる自動詞の絶対構文である：アブハズ語「薪が・燃える」、アディゲ語「人が・耕作している」、アヴァール語「木が・折れた」(*гъветI б-екана*)。また主格化が進行しているカルトヴェリ諸語やインド・イラン諸語は例外であって、ここでは三項受動構文が可能である：グルジア語 *saxl-i* (家 nom=abs) *šen-d-eb-a* (建てられる -d-/II 活用・-a/3/s 主体語尾) *muš-eb-is* (労働者達 pl/gen) *mier* (by [+gen]) = 「家が労働者等によって建てられている」。

能格構文所有説を巡って。既述のように、①所有性説は能格構文の主語の属格形成、②動詞人称接辞と所有形容詞の同一性、③態の欠落という事実、に基いて、動詞語基の名詞的性格を主張したものであった。クリモフは次の諸点でこれが誤りであることを指摘している：第一に、属格とされるものは実は属格ではなく一般斜格形であること。「能格構造の大多数の言語の曲用パラダイムにおいて属格は概して特徴的なものではなく、したがって属格機能のかかなりの部分は正に所有性範疇が果している」(p.106)。大多数のアブハズ・アディゲ諸語等で属格の役割で登場するのは、限定語の一般斜格と被限定語の所有性範疇の結合である。したがって、能格組織の一般的特徴として属格形が能格に等しいとするフィルモアの見解は虚偽情報であり、能格は常に属格以前に形成されたものであることを強調している。能格言語における属格の形成が後発的なものであることは、「内容類型学の原理」でも強調されていることはすでに周知の所である。属格の分離はむしろ主格言語の包含事象であって、ここでは属格機能は他の斜格の中に未分化に存在するに過ぎない⁴¹。第二に、動詞人称接辞と所有的名詞接辞が同形なのは、他動詞で

フェクト *i-çer-eb-od-a* = It was being written (simple passive – progressive passive of action を表す)。一方、[be+完了分詞]形式で表される periphrastic passive (passive of action を表す)では受動態の形成をいうことができるであろう：現在 *da-çer-il-i-a* = It is written (-a=be/3/s 短縮形) // アオリスト *da-çer-il-i* (過去分詞) *iqo* (be/3/s/Aor) = It was written, 例 *Es* (this) *šroma* (work/nom) *ĴapariĴis* (gen) *mier* (by+gen) *iqo* (was) *da-çer-il-i* (written). (H. I. Aronson, Georgian, A reading grammar より)。

⁴¹ cf. Г. А. Климов, Принципы континентальной типологии, pp.46, 108 等 (cf. 山口巖『型学序説』p.74 ; 『類型学研究』2号 拙論 pp.63-64, 79 も)。

なく自動詞の人称接辞の場合だ、としている。さらに、名詞と動詞の未分化性(語基の不安定性、名詞形態素と動詞形態素の同一性)の痕跡を残す言語は確かに存在する(北米諸語、オーストラリア諸語、アプハズ・アディゲ諸語等々)が、このことが即動詞の名詞的性格を証明することにはならない。動詞と名詞の未分化性、近似性自体は事実であるが、言語史は行為名詞の発生は相対的に遅い時期に属することを証明しており、「抽象的な行為名詞の機能が動詞の祖形にあるとすることは、我々には典型的な *hysteron proteron* (前後倒置証明) であると思われる」(カツネリソン) (p.110)。

* * *

名詞形態。能格構造言語の位置格の構成要素として能格、絶対格、属格、与格があるが、基軸的な位置格は能格と絶対格である。属格と与格は極めて稀であって、大多数の能格言語では欠落するが、主格化した言語(例えばカルトヴェリ諸語等)では両格とも存在する(ブルシャスキ語 *gus*「女性」、属格 *gus-mo*、与格 *gus-mu-r*)。この両格の有無によって西と東の二つの分布圏が分れるかに見える。

能格は能格構文の主語を形成する、すなわち他動的行為の主体の名詞に相関する。逆に、絶対格は能格構文中の直接補語格、絶対構文の主語格、情緒、所有構文の間接補語格の機能を果す。ただし、行為主体にも行為客体にも定位する絶対格の機能的『拡散性』が目につくが、一方、能格が絶対格に対して見せる機能的類似性も否定できない。「両格の意味内容面での原理的共通性は、それらが主体・客体関係の伝達に特化したものではない、という点に尽きる」(p.112)。能格・絶対格原理は主体・客体原理に近いとしてもそれ自体ではない、それからずれたものだというこの認識は、本書の段階ではこれ以上に踏み込んでいないが、『内容類型学の原理』(1983)で後にさらに精密化された定式化がなされていることに留意しておくべきだろう⁴²。このことに関連して、能格言語の位置格により相応しい格の名称を如何にするか、という点での過去の研究者等の様々な試みが紹介されている：トルベツコイの *casus agentis* (行為主格) と *casus patientis* (被行為主格)、サピアの *subjective* (主格) と *absolutive* (絶対格) 等、グルジア語記述文法の *motxrobity* (叙述格 *narrative*) と *saxelobity* (主格、名格 *nominative*) 等々がある⁴³。これ等は全て、多様な能格言語の位置格を一義的に定式化することが如何に困難であるかを証明しているが、今日では能格と絶対格を能格言語の基軸格とすることは大多数の

⁴² Г. А. Климов, Принципы континентальной типологии, pp.111-112 (cf. 『「類型学研究」2号 拙論 pp.80-81)。

⁴³ cf. グルジア語 *motxrobity* < *motxroba*=story, tale; tell / *saxelobity* < *saxeli*=name。

研究者によって認知されていることであろう(その機能については研究者によって認識に大きなズレがあるが)。序でながら、クリモフも能格と絶対格という名称を用いるが、能格性原理の精密化の過程で動詞の名称には能格動詞と絶対動詞ではなく、キブリク(A. E. Кибрик)が能格的文類型の共演項(Aktant)役割の特徴付けだけを目的として用いた *agentive / factitive* という用語をクリモフは能格性の意味的決定因子(能格性原理)の名称にも能格動詞、絶対動詞の名称にもこれを当てていることには注意が必要であろう。

能格の機能の多様性。以上に関連しようが、能格には、大別すれば、専用能格と兼務能格がある。クリモフは、前者を「何らかの別機能をもたない能格(いわゆる自立能格なしは非兼務能格、メッシュャニーノフの用語法による能動格[active case])」(p.113)とする。要するに専用能格とは他動詞(能格動詞)の主体(主語)の機能だけを果す格、兼務能格とは「並行的に何らかの斜格の機能を果す能格」(p.113)である。兼務する斜格の機能のうち最も多発するのは具格機能であり(ナフ・ダゲスタン諸語、オーストラリア諸語等)、また所格機能も稀ではない(いくつかのナフ・ダゲスタン諸語等)。これは多くの場合斜格一般の役割を果し、与格機能(カルトヴェリ諸語等)や時として属格機能を担うものがある。概して能格言語の西分布圏では専用能格が、東分布圏では兼務能格が機能している。

有徴格と無徴格の意義。ヤコブソンが指摘するように、能格の意義の方がより特化性が高いのであるから、有徴対無徴の関係は能格対絶対格の関係である。この原則から外れるかに見える場合は、然るべき徴表(マーカー)が定性・不定性や活性・不活性のような歴史的類別原理を残す場合すなわち別の文法的意義を担う場合である：アディゲ語では *шалə-p*「若者」、*фызы-p*「女性」の接尾辞 *-p* は定性マーカー；アランタ語(オーストラリア)では絶対格に *-ə//na* の両形があり、後者(有徴絶対格)は直接補語名詞の活性類を指示する⁴⁴。有徴絶対格が不定性を表す例はメッシュャニーノフも指摘している：ネメプ(ネズ・パース)語 (*-na* 指標) *haman-m päänpsa sikäm-na*「人が・取る・ある馬を」⁴⁵。クリモフは、カルトヴェリ諸語にも、語基タイプに応じた *-ə//i* の二つの絶対格⁴⁶を指摘して主格言語化の過程でこれが主格構文の主格を表すに至るとする(*-i*絶対格が定性マーカーを指すことは第4章に言及)。また、異形態能格の例としてググ・ヤランジ語(オ

⁴⁴ クリモフはアランタ語のこの事実に関連して、『内容類型学の原理』でディクソン批判を行っている。cf. Г. А. Климов, Принципы..., pp.129-131; 『類型学研究』2号 拙論 pp.85-86; R. M. W. Dixon, Ergativity, Cambridge Univ. Press, pp.14-15等。

⁴⁵ cf. 山口巖『類型学序説』p.76

⁴⁶ 例えばグルジア語主格(絶対格) *ena-ə* (language), *çign-i* (book), *ḡac-i* (man), *mçeral-i* (writer)等。

ーストラリア) が挙げられている: dingkar-angka kaya kunin 「人が(活性類-ngka)・犬・打った」と kalka-bu dingkar kunin 「投槍が(不活性類-bu)・人・打った」。これは、この両形によって古い類別語彙との関係を「代償的に」反映させたようとした結果である。オーストラリア諸語以外でもこうした事実が観察され、またこうした対立が所格や奪格(オーストラリア諸語)に、さらには属格(ナフ・ダゲスタン諸語、バスク語)に及ぶケースが見られるという⁴⁷。

能格、絶対格以外の曲用パラダイム。能格言語には、主体・客体関係あるいは活性・不活性関係とは直接的には無関係な格として、所格的な意味の格(方向格 *lative*, 奪格 *ablative* 等)や状況格的意味の格(変格 *translative*, 欠格[～なしに] *abessive*, 具格 *instrumental* 等)がある。特に情緒格(*affective*)を分離する場合もある。

ここであらためて文成分と格の関係について述べる。直接補語は原則として絶対格の形をもつものに対して、主語格となるのは能格、絶対格、情緒格またその他幾つかの格であること、同一の格が諸言語で大きな差異をもつこと、最も多機能的である格は絶対格であり、それは絶対構文の主語、能格構文の直接補語、情緒構文の間接補語を表すことがあり、また同時に斜格の一つ(一般斜格、具格、所格、与格等)が主語も間接補語も形成することがあること、を指摘している。一方、能格構造の多レベルの包含事象は全体として主体・客体関係に定位しているという結論を述べる: 「能格(動詞の能格系列接辞)と絶対格(動詞の絶対格系列接辞)は、行為主体と行為客体の名詞と『図像的』に相関しているのではないにも拘らず、これらの主体・客体関係の伝達に対する共通の定位性は疑念を引き起こすものではない」(p.117)。クリモフが後に能格言語の構造化原理についてより精密化していくこと(例えば能格機能や他動性～自動性原理に対する精密化、「直接」補語、「間接」補語のように括弧付き(条件付き)表示に改めること等⁴⁸)を考慮した上で、この記述を見ておく必要がある。

能格性の随伴事象 共時的には能格構造に動機性はないが、それにも拘らず能格諸言語に発現する確率がかなり高い多レベル(語彙、統語、形態)の諸事象を指して随伴事象と称する。メッシュャニーノフもこれ等の諸事実に早くから気付き、その説明を試みている。能格性の準包含事象(*quasi-implication*)といってもよいかもしれない、と述べる。語彙的随伴事象としては、いわゆる可変動詞等の語彙類の存在、統語的随伴事象

⁴⁷ cf. 下宮忠雄『バスク語入門』大修館書店 pp.233-234

⁴⁸ cf. Г. А. Климов, Принципы..., pp.87, 95-105, 112-114; 『類型学研究』2号 拙論 pp.70, 74-76, 80-82 等。

では情緒構文や所有構文の機能事実、形態的随件事象では名詞と統語的に結ぶ動詞、形容詞、代名詞での形態的な類別範疇、有機的所有と非有機的所有の形の対立、他動詞と直接補語、自動詞と主語との数の「一致」、副動詞類の多様性等である。

語彙的随件事象：動詞語彙－可変動詞 (diffused, labile verbs)⁴⁹。記述文法で「他動・自動詞」(transitive-intransitive v.)、「両義動詞」(ambivalent v.) 等と称される動詞である。可変動詞は、統語と形態面で安定した他動詞や自動詞と異なって「不安定な (labile) 動詞」という特徴付けを受け得るものである。これ等の動詞の特徴は、伝達課題に応じて能格構文も絶対構文も形成し得る能力をもつことであり、それに応じてこの動詞は形態的に他動詞型にも自動詞型にも構造化される(そこで、各可変動詞はそれぞれ二つの語形変化パラダイムをもつ)。こうした状況が可能なのは、これ等の動詞が能格諸言語に輪郭を見せる他動性～自動性による動詞語の語彙化原理に従う非態的な性格のディアテシスを有するが故のことである」(p.119)。多数具体例があるが一部だけ引いておく：例 アディグ語 къэралы-м (国家が) заводы-р (工場) е-щэ (売る) // къэралы-р (国家) ма-щэ (貿易する)；同 редакторы-м (編集者が) статья-р (論説) е-тх-ы (書く) // редактор (編集者) ма-тх-э (執筆する)、等⁵⁰。可変動詞群は大多数の能格諸言語で現れており、特に北米、エスキモー・アリュート諸語で「大規模に」、またチュクチ・カムチャッカ諸語で「高率」、さらにオーストラリア諸語、パプア諸語、ナフ・ダゲスタン諸語、アヴァール・アンディ・ツェズ諸語、ダルギン語、インド諸語、ブルシャスキ語等での存在が指摘されている。これ等諸言語に現れる可変動詞には一定の意味的近似性があり、これらは「意味的に active な動詞類」(p.122)－「播種する」、「耕す」、「牧養する」、「編む」、「織る」、「紡ぐ」、「裁つ」、「縫う」、「(搗いて)細かくする」、「除草する」、「刈る」等の動詞類－である。すなわち意味的には最古の農業生産、家内生産(耕作、牧畜、食品、羊毛、樹木の加工等)に関わる語彙であり、また構造的には直接補語の存在を前提としない動詞類であるという。一方、「多少であれ非他動的な意味付けを許容しない明確な他動的意味の動詞(与える、取る、作る、引きずる、等)や典型的な自動詞(座っている、横たわっている、眠っている、赤い、等)にはこの可変性はない。可変動詞に類似性を示すものに「受動的意義」の状態動詞がある。それは例えばグルジア語文法が「状態受動動詞」(staṭiḱuri wnebiti)と呼んでいるもので、他の自動詞と比べて活用パラダイムが欠損的であるという：abia

⁴⁹ 「可変動詞」という訳語は、ここでは山口巖『類型学序説』によった。拙論ではこれまで「拡散動詞」(diffused v.)、「不安定動詞」(labile v.)という訳語を使って来た。

⁵⁰ cf. 山口巖『類型学序説』p.77

「彼は繋がれている」~eba「彼は繋がれていた」, artqia「彼はベルトをしている」~ertqa「彼はベルトをしていた」, gdia「彼は寝ころんでいる」~edgo「彼は寝ころんでいた」等。また他動詞と自動詞の対立と並行して動態動詞 (dynamic verbs) と静態動詞 (stative v.) の対立をもつアブハズ・アディゲ諸語の静態動詞がこれに相当しその活用組織は単純であるという⁵¹。以上の他、古代エジプト語の「閉鎖的非拡散動詞」(замкнутые недиффузные глаголы [closed undiffused v.]) (「悲しい」「高い」「萎れている・疲れている」「悲しむ、愚痴をこぼす」)、エスキモー語の状態動詞類(к'икмик' пытуг'н'ак'「犬が・繋がれている」等)、チュクチ語の「名詞と動詞の間で中間的な地位を占める」(p.123)「質的狀態名詞」(ロシア語の短語尾形容詞「白い」「楽しい」「強い」等に比定されるという)、オーストラリア諸語の絶対構文を作る「大きい」「寒い」「若い」「恐い」「病んでいる」等の状態動詞(stative v.)が挙げられる。そして最も体系的に「受動的な意義」が機能する北米諸語の例として、アルゴンキン族のオジブワ語のいわゆる「受動動詞」(passive v.)—派生素素 -gwəz(ə) を接尾して作る—が提示されている：pičma- gwəz(ə)「においがする」、(a) ye-kwəz(ə)「疲れている」他多数。

名詞語彙。社会生活上の活動性～不活動性に応じた分類からその分類の完全欠如に至るまで名詞分類の状況は多様であるが、「能格構造の大多数の言語では名詞の類が存在する、といっても恐らく過言ではなかろう」(p.124)。すなわち多くの能格言語が多少とも活格言語の名詞類別の痕跡を留めている。例えば北米、中米の能格諸言語では、アメリカ学のいう名詞の「有生類」animate と「無生類」inanimate の対立があり、有生類には無生ではあっても社会的に重要な (active) 事物 (realia) が、また無生類には無生名詞と並んで幾つかの社会的に重要性が劣る事物の名称が入るという：アルゴンキン語族オジブワ語では、活性類名詞として、人間、精霊、マニトゥ (非人格的な超自然力)、動物、樹木、トウモロコシ、タバコ、太陽、星、ツノ、羽、キセル、リンゴ、コケモモ等が属し、残余の全ての名詞が不活性類に属する。さらにオーストラリア諸語でも同様に、活性類～不活性類の対立とその下位分類によって2類から9分類に至る区分がある等、多少の偏差こそあれその他諸言語における同様の類別が指摘されている。しかし、名詞分類については、クリモフが後に「内容類型学の原理」で総括的に述べた次の記述に尽きていると思われる：能格言語では「類型的に意味をもった類(クラス)による名詞分類は行わ

⁵¹ 静態動詞は a state of affairs or the new state of affairs produced by an event を表し、verbs of being, verba habendi, “be short”, “resemble”, “belong to”, “want”, “sleep”, “stand”, etc の他さらに “be killed”, “be made” のような stative passive verbs を含むという—Tamio Yanagisawa, Analytic dictionary of Abkhaz, Hituzi Syobo Publishing, 2010, p.XV.

ない。ここで可能なのは、(主格言語における場と同じく)主体と客体という二つの純粋に場による名詞の類分けである。これ等の言語の幾つか (cf. 例えば大多数のナフ・ダゲスタン諸語、ブルシャスキ語、幾つかのオーストラリア諸語、個々の北米諸語の状況) に見られる安定した名詞分類は多かれ少なかれ形式化してしまっている。すなわち明確な意味の根拠をもたず、名詞の、他の幾つかの文成分との一致(呼応)のあり方を決定し得るにすぎない⁵²。ところで、名詞類別とその名詞に相関する動詞接辞が依って立つ特徴には違いがあり、名詞類別は指示対象の有生～無生、社会的な活性～不活性の特徴に基くものであるのに対して、動詞人称接辞の能格系列～絶対格系列(あるいは名詞の能格～絶対格指標)の対立は通常、記述される場の主体と客体の違いに基づくものであるが、少数のケースだけでこの接辞は主体・客体関係以外に行為項(Aktant)の類所属を伝達するため両者間の対立が消える。具体例は挙げていないが、例えば上に提示した幾つかのアヴァール語例もそれに相当しよう。

このことに関連するが、名詞と動詞の結びつき(一体的相関性)を示す随伴事象に、重複動詞ないしは二重動詞(verbale doublet)の現象がある。活性的ないしは不活性的な指示対象(active or inactive denotation)の名詞類に応じて同義動詞が別語彙素を取るのである。実質上すでに主格構造化したカルトヴェリ諸語にもその痕跡は残っている: 活性名詞～不活性名詞に応じて変るグルジア語同義動詞「持つ」qola~kona, 「取る」aqvana~ağeba, 「横たわっている」çola~deba, 「(横たえて)置く、寝かせる」çvena~deba, 「知っている」cnoba~codna 等々⁵³。

人称代名詞にまた時に所有代名詞に現れる1人称複数における内包形(inclusive)と排外形(exclusive)の語彙素の対立も、相対的に高い出現率の随伴事象の一つである。すなわち対話の受け手も含めた「我々」-「あなた(達)を含めた我々」-と対話の受け手を除外した「我々」-「あなた(達)を含めない我々」の区別である。これ等の区別は北米の能格言語に非常に特徴的であり、中米能格言語にも、オーストラリア諸語、シナ・チベット諸語、ポリネシア諸語、ナフ・ダゲスタン諸語等に現れるという: チヌーク語(北

⁵² Г. А. Климов, Принципы ..., p.95; cf. 『類型学研究』2号 拙論 p.74

⁵³ その他諸語例も cf. 山口巖『類型学序説』 pp.80-81; また、このような事例は『活格構造言語の類型学』にも同様の例が多数挙がっていることは周知のところである。ただしそこでは、これが活格言語自体の包含事象ではなくその随伴事象として取上げられた。すなわち、同書では、活格構造の再編過程が進行する中で活格(有生)動詞と不活格(無生)動詞への語彙化原理が衰退していくことに対する部分的な「代償」措置として現象化する、と説明していた。その際、上例グルジア語の「持つ」のような「遅い発展段階の単語にまで」この代償措置が現れていること、古代グルジア語でさえこうした対立がさほど厳密ではなかったこと、を指摘している—cf. クリモフ『新しい言語類型学』三省堂 pp.92-93, 181-183, 197, 211 等。

米) lxaika (内包形) nicaika (排外形), アプハズ語 hara (内包形) ~hart (排外形)。一方、多数の言語(エスキモー・アリュート諸語、チュクチ・カムチャッカ諸語、ブルシャスキ語、バスク語)でこの対立は見られない。「能格言語構造と内包形～排外形の語彙素の区別との間に必然的な連関性はない。・・・能格構造内にはこの現象に対する如何なる論理的根拠も見出し得ない」(p.131)。一方、「活格構造言語の類型学」では、この代名詞組織を活格性の包含事象として記述して来た⁵⁴。すなわち能格言語における活格言語の残滓現象と捉えて来たのである。しかしその後クリモフは、『内容類型学の原理』でこれを類別言語の残滓として修正している:「この区別は、グリーンバーグのニジェール・コンゴ連合の諸言語(パントゥー、パントゥー系諸語等若干) 多数において、1人称複数以外の全人称に関わるいわゆる相関的人称代名詞が形成する活発な語彙対立のさらに大きな組織中に有機的に組み込まれている (cf. 「君+彼」, 「君達+彼」, 「彼ら+彼」等の意味)。こうした関係から推定できることは、内包的代名詞と排外的代名詞は類型学的に類別組織に相関するものであること、またそれが活格、能格、主格型諸言語において残滓的に用いられていることであり、それら諸言語ではこの代名詞が動詞形態面に同様の区別をもつ動詞人称指標として転置される (транспонирование [transponieren, transponere]) ことが、頻繁に観察される (正にこの点で筆者の先行研究の一つで、両代名詞の区別の構造的動因 (motivation) を類別組織に近接する活格組織の枠内に求めようとしたことは、破棄せざるを得ない)」⁵⁵。

形態的随件事象。動詞形態面での特徴として他動詞と直接補語、自動詞と主語との数の「一致」«согласование» (agreement)、時制とアスペクトの形態構造、所有範疇としての有機的所有と非有機的所有の形式が取上げられる。

主語あるいは直接補語と動詞の数の面での一致。北米諸語、ブルシャスキ語、カフカース諸語の例が多数挙がっている: チヌーク語「見(え)る」el-kel(単数客体)~e-kal(複数客体); ブルシャスキ語「座(ついている)」hurūt-as(単数主体)~huruči-jas(複数主体)等々。この区別を動詞、名詞の両語形に反映させる例として古代グルジア語例: daleç-n-a kalak-n-i「破壊した・町々を」(複数指標-n-を動詞、名詞に組み込む)等⁵⁶。また、この区

⁵⁴ cf. 北米のマスコギ語、スー語、南米のトゥピ・(グ)ワラニー語の同組織について、『新しい言語類型学』三省堂 pp.88-90 他。

⁵⁵ Г. А. Климов, Принципы..., pp.144-145 (類型学研究における歴史主義と体系性の原理を強調する、という文脈の中での記述である); cf. 『類型学研究』2号 拙論 pp.54, 88

⁵⁶ cf. 山口巖『類型学序説』p.81. cf. 門外漢の感触にすぎないが、韓朝鮮語にも類似例?(Ex-word 韓日辞典より): 들(tul)は名詞、代名詞について複数性を表すが (hakseŋdul「学生達」)、これが一部の用言活用形に組み込まれて主体の複数性を表すとされる→ 아직(adfig まだ) 자고들(tʃagodul

別を補充法(suppletion)によって行う言語がある(cf. 英語 massacre, troop)。これはカフカース諸語 3 群全てに現れるという：グルジア語「殺す」mo-ḱvl-a (単数客体) ~da-xocv-a (複数客体)；「倒れる」vardna (単数主体) ~cvena (複数主体) 等。「この現象は活格構造の極めて典型的な特徴の一であって、北米の能格諸言語にとって最も特徴的であり、ツィムシアン語では最も多用する他動詞[殺す、取る、立てる、食べる等]、自動詞[死ぬ、立っている、走る、行く等]およそ 30 個がこの現象を知っている」(p.133)⁵⁷。

能格言語の形態構造におけるテンスとアスペクト(動作態 Aktionsart) については、研究があまり進んでいないため何か統一的な特徴づけをすることはできないとした上で、アスペクト特徴が時制対立に対して極めて優勢であるアメリカの能格言語(ボアズ F.Boas 指摘の)やエスキモー方言、シナ・チベットの能格諸言語、チュクチ・カムチャッカ諸語；明確な時制対立の一方でアスペクト対立が脆弱なブルジャスキ語他「西」分布圏の能格諸言語(バスク、ナフ・ダゲスタン、西アジアの諸古語)、過渡的類型の言語であるカルトヴェリ諸語、インド・イラン諸語；以上の「中間的な地位を占め」、発達した時制指標と相当分岐したアスペクト階梯をもつアブハズ・アディゲ諸語、という三分類と具体例が示されている(省略)。

有機的所有と非有機的所有の形態範疇。有機的所有の所有形を取る名詞群は、原則として、①人間、動物の身体部分、稀に樹木、植物の部分(頭、手、足、目、耳、葉、根等)、②親族名称(父、母、祖父、兄弟、姉妹、息子、娘等)、③人間ないしは動物に密接に関わる幾つかの概念、事物(名前、眠り、怒り、矢、獲物、足跡、糞尿等)であり、それ以外の名詞は全て非有機的所有の形しか取り得ない名詞である。前者は常に特別な所有接辞を取り、後者はその特別な所有接辞にある別の弁別要素を合成するか(北米、中米諸言語、アディゲ語)全く別の接辞付加による方法を取るか(オセアニアの諸語)である：アディゲ語 с-пэ 「私の・鼻」、с-къош 「私の・兄弟」、с-цІэ 「私の・名前」等に対して с-и-шы 「私の・馬」、с-и-тыхль 「私の・本」等。周知のように、これについてもすでに「活格構造言語の類型学」の処々において、この両形の区別と活格言語の論理的相関関係について記述

眠って) 있다(i³ta いる)(자다 tʃada=眠る, 있다 i³ta=いる、ある) / 그것을 (kugosul それを) 보고 (pogo 見て) 무척(mutʃog とても) 좋아들 (tʃoadul 喜ん) 렀다(hɛ³ta だ) (좋아하다 tʃoahada=喜ぶ、好きだ、好む)[単数では들(tul)を外す]。専門家の御教示を得たい。

⁵⁷ cf. 『新しい言語類型学』(三省堂) p.80-82 他→このような対立は「数の形態的な範疇が欠けているか、あるいは発達が極めて弱いということに関連がある。この範疇が文中で活性類名詞と語彙的に呼応する少数の活格動詞に限られていることは・・・ここでは数の範疇自体が『有生』の指示対象としか結びつき得ないことを鮮明に示している。このような対立の存在は、またもや、活格型の代表言語では能格言語や主格言語に比べて語彙が如何に高い機能的負担を担っているかを証明している」。

されている⁵⁸。能格性一般論を検討する際にも通常これについて話題になるが、これは「能格性の随伴事象と見なすことはできない。大多数の能格構造の代表言語では有機的所有と非有機的所有の特徴によって機能的に弁別される所有接辞の対立が存在しないからである。ただし、このような対立は幾分不徹底な形ではあるが、一連のアメリカ諸語とアディゲ語にのみ現れている」(p.137)。ところが、大多数の能格言語(北米、オーストラリア諸語、ブルシャスキ語)では、有機的所有に相当する名詞には機能的に全く区別のない所有接辞を使い、非有機的所有に相当する名詞にはしばしばその接辞がなくてもよい：ブルシャスキ語前者 -Itumal「耳」、-mi「母」等～後者 halanc「月」、būpuš「カボチャ」等。それ以外の多くの能格言語では、何の弁別的制限もない所有性範疇が機能し、さらに「西」分布圏の能格言語では名詞に対する接辞付加ではなく所有代名詞が現れている：バスク語 ene semea「私の・息子」；アヴァール語 dir emen「私の・父」等。結局、「形態的な所有性範疇と能格構造との論理的関連性を論証する可能性は極めて薄い。・・・ただし、能格性機能の通時的な見通しの観点から見れば、この所有関係の伝達法は極めて注目に値する」(p.138)。

可変動詞類の本質、格パラダイムの特徴、動詞構造における時制とアスペクトの相関関係、そして所有関係の伝達法に関する問題の検討に関連して、能格性分布域全体は概ね二つの分布圏―「西」と「東」―に分ち得ること、能格性全体論にとってこの区分が多くの点で有効である。もちろん、この区分は条件的なものであって、例えばアブハズ・アディゲ諸語の場合西の位置を占めつつ、構造特徴全体が東分布圏に引っ張られる傾向があり、また逆にアメリカの能格諸言語の幾つかももう一つの例外だと印象はある。最後にまとめとして、「本章に含まれる能格構造の共時的特徴づけから必然的に、この構造にはかなり明白な内的矛盾があるという結論が出てくる。・・・多レベル事象の相対的に小さな集合(他動詞と自動詞の語彙素の対立、能格構文と絶対構文の相関性、動詞述語における能格系列と絶対格系列の接辞の対立、名詞成分における能格接辞と絶対格接辞の対立)だけが能格性の原理的な関係の伝達のために働く組織体系であり、また正にそのことによって能格性本来の構造的特性を形成する組織体形を構成する」(p.141)。

第4章 通時態における能格性

本章では、「能格構造機能化の通時的法則性」すなわち「能格性の進化 (evolution) の基

⁵⁸ 同上 pp.123-129 他。山口巖『類型学序説』pp.101, 102 他。

本法則の検討」(p.143)を行う。能格性の起源問題については終章で扱うが、能格性の起源と進化発展は一つの過程である。能格性の通時面の「最も一般的な法則性は言語構造のあらゆるレベルでの能格性の包含事象と随伴事象の漸次喪失傾向である、と定式化できる」(p.143)。この場合、「主導的な役割を果たすのは、恐らく能格性の語彙的包含事象の改新であり、それに起因して言語構造の他のレベルでの然るべき変化—なかならず統語組織と形態組織における変化—が発生する」(p.143)。

語彙。通時面全体を鳥瞰すれば、可変動詞類の劣化縮小や名詞類別の再編劣化過程、典型的な主体・客体関係を表す動詞類(*verba habebdi*, 連辞動詞)の生成過程、1人称複数代名詞内包形～排外形の対立の中和化の過程である。

可変動詞、状態受動動詞、情緒動詞。「能格諸言語にとって非常に特徴的なのは、頻出する『可変』動詞 (*diffused v.*) 群をその特色に相応しい他動性～自動性という特徴による語彙素区分によって次第に縮小していく過程である」(p.144)。このような分離過程は基幹路線をなすものであるが、個々のケースでは可変動詞を形成していく過程も観察される(アブハズ・アディゲ語やインド・イラン語の事実が挙げられている)。これは言語構造の進化過程は決して直線的ではないことを示したものである。本来この動詞群の統語的かつ形態的な両義性(*ambivalency*)は能格構造内に動機性(*motivation*)をもつものではなく、「別の質的対立に服すべく定位されている」(p.145)もの、すなわち活格動詞と状態動詞の区別を行う活格構造言語の語彙組織に遡及するものである。そして、活格動詞は態(*voice*)とは異なる性格のディアテシスを実現したものであった。一般的に、大規模な可変動詞群の存在は初期の能格構造段階の典型的な特徴であり、逆に後期の発展段階ではこの動詞群が完全欠落するケースもある。最大規模の可変動詞群の例は北米の能格諸言語に立証され、それらは概して活格構造との密接な構造的連関性をもつ。エスキモー・アリュート諸語ではこの動詞群の占有率は極めて高率であること、ダルギン語でも持続動作態で形態的、統語的に他動詞構造も自動詞構造も取り得ること、またチュクチ語では2000以上の動詞の内1100の自動詞、150の非使役他動詞、300の可変動詞があること、古代エジプト語では200、アディゲ語では94、アブハズ語では80の可変動詞、等々について言及する。一方、ボウダ(K.Bouda)の研究から、アヴァール語では「他動詞～自動詞原理による動詞語のさらに進んだ安定化 (*stabilization*) 過程」(p.147)が観られ、「他動的行為の反復性、多回性ないしは持続性を表す動詞は全て、主語の名詞を能格形ではなく主格形におくことを条件付ける」(p.147)、と指摘し、これは歴史的な可変動詞が他動詞と自動詞へ語彙的分化を起して行く過程を例証するものだとする。さ

らに、チェチェン語では可変動詞は4個のみ、ラーク語に残るそれは一個「死ぬ・殺す」のみという証言も拾っている。また、可変動詞がいわゆる「他動・自動詞」という狭い範囲の動詞群として残滓する例もある：レズギン語 **кьин**「殺す・死ぬ」、**хун**「1 打ち壊す・壊れる, 2 産む・生れる」、**чүрун**「焼く・焼ける」、**ругун**「1 沸く・沸かす, 2 煮る・煮える」、等。可変動詞類の再編過程を語源面から追跡できる例として、最古の共通カルトヴェリ語の ***qed·: qd**「行く・携行する」のかつての可変性(不安定性)を示すスヴァン語 **an·qad**「彼が来た」～**an·qid**「彼が運んで来た」が挙げられ、またグルジア語 **çv·av·s**「燃やす」～**i·çv·i·s**「燃える」等が示される。そして、可変動詞類の他動詞あるいは自動詞としての語彙化過程で主導的な役割を演ずるのは、結局その使用頻度であろうことが付言される。「状態受動動詞」類もまた、可変動詞類と同様の規模縮小傾向をもち、「全体として・・・可変動詞の再編に比して一層速いテンポで実現されたであろう」(p.148)。そのため能格構造言語における定着度が低くなり、またこのことには、可変動詞と違って自動詞と同様絶対構文だけを生成することにも関連がある。情緒動詞類も能格構造内に動機性をもち得ないのであり、これもまた縮小傾向をもつ。この動詞群の存在は現在すでに能格言語内の少数派に属する。カフカース諸語の資料に最も完全な形でその縮小傾向が窺われるという。例えばバツビ語 **МитІу-ин (dat) хьо (君 nom) гу // МитІо-с (erg) хьо гу**「ミトが・君・見る」は、すでに情緒動詞が他動詞と混交している例である。別のナフ・ダゲスタン語である標準ダルギン語に残る情緒動詞は **дигес**「欲する・愛する」一個だけである。ウディン語、アブハズ・アディゲ諸語にも同様な過程が進行しており、アブハズ語での「倒置」動詞と他動詞の強い接近傾向がいわれる：他動詞形 **и-л-гойтІ**「それ・彼女・運ぶ」～情緒形 **и-с-гуапхуейтІ**「それ・私・好む(好きだ)」の両者の構造上の違いはない。

名詞分類の分野。名詞分類の再編と劣化衰退過程の初動段階では、活性(有生)～不活性(無生)特徴による論理的に透明な名詞分類の基盤が曖昧になって来ること、分類原理の抽象化が起っていくことである。「能格諸言語にわたって最も頻繁に繰返される発展方向の一つは、活性類と不活性類のより古い名詞分類を社会的に活動的な指示対象と非活動的な指示対象の対立原理に基く名詞分類へ再編して行くことである」(p.150)。したがって、前者には社会的に重要な事物の名称が、後者には社会的に重要性が劣る動植物の名称が移行して行く。オジブワ語(アルゴンキン諸語の一)で活性類に属するのは人間、動植物の名称以外に社会的に重要な事物の名称が含まれているという(星、釜、歯、目、等)。一般的に、活性類と不活性類という分類はその本来の意味内容的職能を失って

語の文法的結合手段として形式化して行くが、この対立を排除して行く二つの基本方向として、その「直接的排除の方向」と「ある段階で様々に社会的重要度を反映させたさらに複雑な名詞分類を形成していく方向」(p.150) が指摘される。現段階で何れの方向が一般的か、とはいえないけれども、完全喪失は能格性の再編過程が本質の所で進行することを示したものと述べる。そこで、この再編過程全体が記述されているというナフ・ダゲスタン諸語を例に類別組織の再編過程を追跡する。そこでは活性・不活性という当初の区分を錯綜する形でその祖語の状態に男性、女性、動物、その他という4分類組織が存在したこと、さらにその後それはより細分化された類別形成に向い、アンディ語、ツェズ語等では6類別組織、バツビ語では8類別、アルチ語では11類別があるがすでにその論理的基盤を失っていること、一方逆に、アヴァール語、タバサラン語では4類別組織は劣化してそれぞれ3類別、2類別になり、レズギン、アグル、ウディンの三語では類別法は今日すでに完全に廃用である、という全景を鳥瞰している。北米チヌーク語の3類別組織は活性類がさらに二類（男性と女性）に分化した結果であり、これは印欧語の3類別区分に類似すること、多くの言語に観られる二系列の数または格の接辞の区分は活性・不活性分類の名残りであることーバスク語属格 *-en* 有生 // *-ko* 無生、所格、目的格 *destinative* ; スヴァン語の二つの能格 ; ウディン語の二つの具格 ; 古代グルジア語の二つの複数接辞 ; チュクチ・カムチャッカ諸語の二つの能格、等ーについても述べられている。

さらに個々の語彙的随件事象の再編が起って行く。活性と不活性の指示対象に呼応する動詞二重語や複数1人称代名詞の内包形と排外形の対立は姿を消し (cf. 既述の随件事象の項)、逆に主体・客体関係に重心を置く *verba habendi* (所有動詞) や連辞動詞等が顕現してくる。「語彙組織における能格構造の最も興味深い通時的法則性の一つは、典型的な主体・客体関係を伝達する多数の動詞語が生成されてくることである」(p.153)。所有動詞を持たない主格言語もあることから、これは最も遅い発展段階の語彙素に属しようが、これ以外にもこの「多数の動詞語」類には「取る」「奪い取る」が入り、また「与える」も入るかもしれないという。「これ等の動詞の形成過程は、原則として別のもっと具体的な意味の動詞ー握っている、立っている[cf. 独語 *zustehen*]、横たわっている、(横たえて)置く、運び去る、等のタイプの動詞ーの使用を経由している」(p.153)。「立っている」を所有動詞に使うアブハズ語の例が挙げられている：「彼には・歯が・立っていない」→「彼に歯がない」。すでにこれ等の語彙素の形成を完了しているカルトヴェリ諸語、古代グルジア語にも「立っている」「横たわっている」「座っている」等の語彙素を基礎とする所有動

詞の痕跡が残っているという。連辞動詞はほとんど「西」分布圏の能格言語にだけ立証される。例えばバスク語 *hura* (それ) *gizon* (人) *d-a(it-is < be=izan ; d=it [3/sg/S 指標])* ; グルジア語 *is* (それ) *ḡaci* (人) *ar-is* (です 3/sg) ; アヴァール語 *дов* (それ) *адам* (人) *в-уго*(男性類マーカー-в-です)「それは(彼は)・人・です」。しかし、「東」分布圏の能格言語では普通、連辞動詞は欠落するため、そこでは名詞語基を伴う二項構造となるという (cf. 露語無連辞文語法 *он [彼] человек [人]*)。

複数 1 人称内包形と排外形。多くの能格言語ではこの対立は中和化して行く傾向をもつ。この過程は、名詞語彙自体の類別の崩壊、名詞の語彙的類別に呼応 (一致) する他品詞内での形態的類別範疇の崩壊と並行して進行する。この名詞類別の再編と複数 1 人称代名詞二形の再編との相関性を示す事例は、カフカース諸語に見られる。この代名詞の二形システムは、名詞類別をかなり鮮明に残すナフ・ダゲスタン諸語でははっきりと残り、アブハズ・アディゲ諸語内ではアブハズ語、アバザ語だけが名詞類別をある程度残し、名詞類別が欠如するカルトヴェリ諸語では現代スヴァン諸方言や古代グルジア語に二形対立の残滓が認められるにすぎないという。また、その再編過程の初動段階では対立する二つの語彙素がそこから抽象された単一の「我々」の意味として混交を始め、続く段階では両形の一方の形がもう一方の形を駆逐して一般化する。その選択に応じて、同系統言語内で、複数 1 人称代名詞以外の代名詞の語源はみな同一なのに複数 1 人称代名詞の語源だけが異なることになる。例えば、ガムクレリゼによれば、カルトヴェリ諸語内でグルジア語 *čven*, メグレル語 *čki*, チャン語 (ラズ語) *čku* に対するスヴァン語 *näj* の違いは、歴史的な内包形 **čuen(a)* ~ 排外形 **na-* の差を表している⁵⁹。また再編過程の中で、複数 1 人称代名詞両形の消滅を代償すべく動詞構造内に機能的に類似の人称接辞を組み込んで生き残るような事例—マム語 (—マヤ・キチェ語の—/グアテマラ) *o-b'et* 「我々 (incl) ・歩いた」~ *o-b'et-e* 「我々 (excl) ・歩いた」—あるいはまた所有代名詞の二形として生き残る過程—*co-mam* 「我等の (incl) ・父」~ *co-mam-an* 「我等の (excl) ・父」—が見られるという。

統語法。能格的文類型の再編は、上述語彙構造の再編に連係する。能格構文と絶対構文の段階的中和化という最も重要な改新法則性は、他動詞と自動詞の語彙素の対立が弱化していく過程の開始期を反映したものである。この過程が多くの場合に、直接補語の省略として現れてくることも偶然ではない。一方、情緒構文はその初期段階では急速に

⁵⁹ 印欧語の場合については、山口巖『類型学序説』 pp.255-258。

他動詞に再編されていき、能格構文との均等化傾向を示し、最も遅い段階ではこの構文は主格構文と混交する。さらに所有構文は真の *verba habendi* の形成に伴って次第に姿を消していく。

文における動詞述語の支配的地位の低下が起る。とりわけ動詞述語と直接補語の結びつきが弱化して行く。そのことの当然の結果として、遅い段階位相では抱合的結合形式を消失し、また語順はより自由になる傾向を示し、能格言語の SOV と主格言語の SVO 語順が競合し始めることになる。「能格構文と絶対構文の混交過程は結局は文類型の主格化を示すのであるが、それは種々の能格式構文の機能化段階を経由する。すなわち能格式構文の形成は直接補語の消失に関連する。この場合、文のシンタグマ構成に明らかな変化が起る：二つのシンタグマー述語的シンタグマと補完(補語)的シンタグマーに代って一つのシンタグマー述語的シンタグマーの必要性だけが残る。ある場合には直接補語は跡形もなく排除され、またある場合にはそれは動詞述語の中に編入されてしまう」(p.158)。後者の例として、アブドゥラエフ (З. Г. Абдуллаев) の研究から、ダルギン語の能格式二項文の形成過程を例証している：нуни (私が erg) яхI (我慢) барра (した) > нуни яхIбарра(我慢した)の過程を辿った、すなわち直接補語「我慢」が述語に編入され一項化した(「我慢した」という合成語の形成)という。このような統語的再編の最も明確に示すのはカルトヴェリ諸語であり、またインド・イラン諸語、等々にも見られるという。カルトヴェリ諸語については、現在時制から能格的文類型を駆逐してその機能範囲を縮小していくだけに留まらず、能格的文類型が実現されているかに見える文類型においてすらそれが一貫性を欠くことを示す諸事実—動詞形における能格系列と絶対格系列の人称指標が混濁、混交すること、また時にそれが概して動詞の語形に表れないこと—があることが指摘される。

時制系列の形と能格構文の機能範囲の関連問題。先ずカルトヴェリ諸語の場合、能格構文の機能範囲の縮小過程がその特徴である。能格構文は、最古の共通カルトヴェリ諸語では他動詞述語のどの時制系列にも広がっていたが、現在ではアオリスト系列と結果系列の時制形に縮小して来ている。周知のように、現在時制では主格構文が機能する。この過程はブルシャスキ語でも観られる。ところが一方、インド・イラン諸語のいわゆる「アオリスト能格構文」には幾分異なった事情がある。これは実は「主格構造をそのベースとして成立したものであり、現在では大多数の場合劣化しつつある(能格性の進化の逐次的段階位相は標準インド・イラン諸語が文証する)」(p.160)。これはつまり改新である。レガメ (C. Regamey) の研究では、他動詞述語のあらゆる時制系列に能格構文が機能す

るシーナ (Shīṇa)、ネパールの諸言語や中部パーハーリー (Pahārī) の諸方言の事例は、「能格構文の使用に時階の制限を加えない隣接チベット・ビルマ語群タイプの基層言語の影響がこの構文の拡大を促した可能性がある」(p.160)。またカルトヴェリ諸語の一であるチャン語(ラズ語)での能格的文類型の「前線展開」(frontal functioning) は現在時制構造への二次的拡大によるものである(先行段階は、他のカルトヴェリ諸語と同様アオリストと結果時制系列のみへの同構文の縮小)。これら両過程は何れも「能格構造の同じ劣化現象の異なる方向ないしは段階を反映したもの」(p.160)である。

構造的に能格構文に相関して存在する絶対構文は、能格構文の劣化に並行して「かなり主格構文に転換しやすくなる」(p.162) 一方で、情緒構文、所有構文は「非常に長期に亘って残存することがあり得る」(p.162)。情緒構文の劣化の前提には勿論情緒動詞群の衰退があるが、フィホフスカヤの研究 (1936 年) によれば、ヤペテ諸語では少数の例外を除いて *verba sentiendi* の情緒構文がなお優勢であって衰退過程の初期であると思われること、一方これとは対照的に、印欧諸語ではすでにこれの衰退過程末期であること、が先ず指摘される。続けてクリモフは次のようにもいう：「情緒構文から能格構文への再編のケースはすでになんかなり広く認められるのであって、このことは能格構造言語内では情緒構文が共時的には動機性を欠いていることを証明している」(p.163)。その上で、カルトヴェリ諸語の具体的な事実として、*verba sentiendi* と目される動詞の振る舞い—グルジア語 *xedva* 「見(え)る」, *codna* 「知っている」, *grjnoba* 「感じる」等は専ら能格構文または主格構文を作り、*smene* 「聞(え)る」, *qvareba* 「愛する」等は現在時制系列では情緒構文、アオリスト系列と結果時制系列では能格構文と主格構文を形成すること—を示す。「深く再編が進んだ情緒構文のもう一つの例は、実質上主格化したウディン語にある」(p.163)が、そのニジ方言では情緒構文は完全に消滅し、もう一つの方言ヴァルタシェン方言では *verba sentiendi* 群—*ababaksun* 「知っている」, *aḱusun* 「見える」, *ibaksun* 「聞える」, *buqsun* 「欲する、愛する」, *qibsun* 「恐れる」等—は「多少情緒構文らしき構造」(p.163)を形成し、主語は与格だが動詞活用は主体原理に基く(同時に対格の直接補語も含む)という：*za a-za-ḱsa pak* 「私(dat)・見える・庭」; *jan bu-ja-ḱsa basuḱsun* 「我々(dat)・欲する・眠ること」; *za bu-za-ḱsa bez äiloyox* 「私(dat)・愛する・私の・子供達」⁶⁰。

⁶⁰ 動詞人称指標は、動詞形の接尾辞ないしは接中辞としても組み込まれる：「私・知っている」ニジ方言 *zu ava-zu* ~ヴァルタシェン方言 *za aba-za*；「我々・知っている」*jan ava-jan~ja aba-ja(x)*、等々(人称代名詞曲用は *zu=1/sg/nom, erg*; *za(x)=1/sg/dat*; *jan=1/pl/nom, erg*; *ja(x)=1/pl/dat* であるが、動詞人称指標は人称代名詞に相応する形を、ヴァルタシェン方言では、他動詞、自動詞には *-z(u)*, *-jan* を、情緒動詞には *-za(x)*, *-ja(x)* を組み込む—その他については cf. Языки рос. фед. и

「情緒構文とは違って、所有構文は能格構造諸言語に非常に広く行われている。これの消滅は真の所有動詞の形成に直接関わっている」(p.164)。

能格構文の三つの形態タイプ—動詞型、混合型、名詞型—の通時的段階性について。活格言語における同様の形態三タイプの存在とその歴史的発展過程については、すでに「活格構造言語の類型学」に定式化されており、周知の所であろう⁶¹。こうした形態タイプの存在に気付きながらも、それを「発達年代順に並べることは敢えてしないでおう」(p.165-166)と語っていたメッシャニーノフの時期とは違って、近年における能格構造諸言語(とりわけインド・イラン諸語、カフカース諸語等)の諸研究、諸資料の集積によって今日ではすでに十分にその発達過程を再現できる。上に再三指摘されたように、専ら動詞述語が能格言語における基幹支配要素であるというテーゼを承認するならば、能格性の関係を動詞語に集中配置して他の成分に対する動詞述語専制を象徴する動詞型こそが能格的文モデルの最も初期段階のタイプであることは論理的必然でもある。しかも、「動詞型が活格構造と最も明白な関連性をもつ諸言語—北米ならびに中米諸語、パプア諸語、アブハズ語、他若干の諸言語—を特徴付けていることは、経験事実によっても確認される。同時に、文構造の他の形態タイプを動詞型に再編していく先例がないという事実は象徴的である」(p.166)。動詞形における能格性関係の表出の混濁、弱化を支えるべくその関係の表出の比重は動詞述語と結ぶ名詞に移って行く。曲用の萌芽すなわち混合型形態タイプの生成過程であり、その際場所的な意味の後置詞を曲用組織へ編入する等して位置格が形成されて行くのである。「この過程は恐らく、他動詞の形態構造における変化すなわち形態的な類別範疇のような能格性の随伴事象(//活格構造の包含事象)が、形態構造中で劣化縮小していくことに関連がある。すでに動詞の語彙的性質自体の改新の始動がこの過程の背後に潜んでいる、という印象は拭い難い」(p.167)。そしてこの過程は、アブハズ・アディグ諸語に立証される。例えば、アブハズ語とアバザ語(アバジン語)は曲用をもたないが、ウビフ語と二つのアディグ語⁶²では不完全ではあるが(名詞の全範疇がその語尾を取る訳ではない)「かなり初歩的な」能格と絶対格のパラダイムが存

сосед. государств, том III, Наука, 2005, p.185

⁶¹ 『新しい言語類型学』三省堂 第2章(例えば pp.47-51) 他処々で指摘されている。

⁶² アブハズ・アディグ諸語は、イベリア・カフカース諸語の北西部語群を形成し、この語群の中のアブハズ語とアバザ(アバジン)語、またアディグ語とカバルダ語はそれぞれ最も近い同族語である。アディグ語(адыгейский язык)とカバルダ語はアディグ語(адыгский язык)ないしはチェルケス語と総称される。アディグ人とカバルダ人は自らの言語を abəza-bzā と呼ぶ—Языки народов СССР, Том IV, Иберийско-кавказские языки, p.95 より。cf. アブハズ語に曲用がないことについては、Tamio Yanagisawa, Analytic dictionary of ABKHAZ も。

在して、すでに混合型が主導的な地位を占める。「同時に、能格と絶対格の形成が、これ等の言語では、動詞構造における形態的な類別範疇の消失と並行して行われている」(p.167)。混合型はさらに、パプア諸語の中のボング語（ニューギニアの少数言語）で、北米の幾つかの能格言語（特にメッシヤニーノフが研究したネメブ語）で、また死語であるエラム語でも認められるという。さらにこの混合型を名詞型へ再編して行く過程も、ナフ・ダゲスタン諸語の幾つか（レズギン語、アグル語、一部タバサラン語）、イラン諸語に認められる。チャン語（ラズ語－カルトヴェリ諸語の一）も同様であるが、「ここでは動詞の能格接辞と絶対格接辞の対立が完全に中和化してしまっている」(p.168)。バスク語でも状況は同じであって、「他動詞のインパーフェクト(半過去 *imparfait*) では、歴史的な絶対格接辞がすでに能格接辞の役割で登場している」－cf. *ne-gien* 「私・した・(それを)」, *ne-kien* 「私・知っていた・(それを)」, *ne-karren* 「私・運んでいた・(それを)」(p.168)。ギョホフスカヤは 1931 年バスク語資料に基いて、混合型から名詞型への構造変化を理論的に証明しようとした。バスク語インパーフェクトの他動詞は 3 人称の直接補語がある場合に能格構文(論者の用語では「受動構文」*пассивная конструкция*)を取らず、ヤペテ諸語と同様自動詞と同じ活用をするが、独立代名詞ないしは名詞が表す主体は自動詞におけるような主格になる訳でなく能格(論者の用語では「能動格」*активный падеж*)である *ni-k* になる：つまり *ni-k n-u-en* 「私によって・私・持っていた・(それを)」のような、過渡期における「ブロークンな構文」(*ломаная конструкция*)の生成を挙げて、その発展過程を例示したのであった。「彼女は、発展の原動力を、歴史的な 3 人称客体指標の消失によって自動詞と混交してしまった動詞述語の質の変化に看取したのである。結果として我々が観ているのは、『形の一部一動詞そのもの』はすでに変形を完了しているのに独立主語の方は古い形を残して続けている－主格ではなく能動格に立つ」という段階位相にあるブロークンな構文なのである」(p.169)。以上のような発展構想図は、多くの能格諸言語において完全に実現されていることについては十分な歴史文法の証明もあるが、その構想図の「抽象的な性格」も考慮しておかなければならない。つまり多数の言語において異なる形態タイプが共存、混交する事例は、ギョホフスカヤの例も同様正に過渡期の姿である。この構想図から幾分外れる事例としてクリモフは以下のような二つのケースを挙げている。一つは、最初から混合型から始まる能格言語のような事例。もう一つは、ある形態タイプで停止する場合である。前者として、混合型の活格言語から生じた能格言語（非常に稀ではあるが）では動詞型を経ないこと、またイラン諸語の歴史では能格構文が「周知の如く歴史的な属格限定語をもつ所有文を

基礎とした混合型の姿のまま」(p.169-170) 形成された例、を挙げている。後者としては、北米、中米諸語の動詞型について述べている。

主語として登場する名詞範囲の拡大。「能格諸言語の歴史は、名詞が文中の主語を占めるという抽象の限界は現代の状態に向うほど拡大するという、主格構造の代表言語に基いて確認される法則性を裏付ける」(p.170)。したがって、活格言語との密接な関係を示す能格言語では主語の位置に立ち得る名詞の範囲は狭く、例えばマヤ・キチェ諸語や特にアルゴンキン諸語ではそれは活性類名詞だけである。逆に多少とも主格化された能格言語では「真の他動的行為の遂行能力の有無」に関りなく極めて広範囲な名詞集団が主語の位置に立ち得る(多くの場合ここにかつての不活性類名詞用に具格が能格の役割で機能化するのは歴史的発展の反映である)」(p.170)。

構造的再編の核心は動詞述語の質的再編である。「これ等の再編は他動詞と自動詞の語彙的対立の弱化を反映したものであるが、この語彙的対立の弱化は主格構造の代表言語ではすでに奥深く進行しつつある。周知の如く、主格構造言語では、他動詞～自動詞の範疇はもはや語彙的なものでなくせいぜい統語的範疇であると見なされる：cf. 主格言語の記述に採用される、直接補語を許容する動詞としての他動詞の定義(両者のかなり日常的な意味的『可変性』だけでなく、原則となっている形態構造の同一性も、恐らく両者の語彙的非弁別の証明と見なされよう)」(pp.170-171)。

.形態。能格言語における品詞について、能格言語段階は「前動詞状態」とか名詞と動詞の分化の開始期だとかあるいはまた形容詞の欠如という議論が過去に述べられたが、近年の多数の諸研究は、名詞と動詞という二基本品詞は活格言語段階以来すでに明確に区別されていることを証明する。形容詞の欠如も少数の能格言語だけの特徴に過ぎない。総じて名詞、動詞、代名詞、副詞そして普通は形容詞も存在するが、比較的少数の言語では形態的未分化の跡は残っている。全体として形態的な語類の生成過程は品詞としての動詞の進化発展に関連がある。動詞と性質形容詞や分詞間にある起源的關係は鮮明である(cf. 活格言語段階では性質形容詞や分詞は欠如)。同時に、大多数の諸言語で関係形容詞類が欠如するが、その原形として機能するのは限定機能での名詞である。所有代名詞や関係代名詞類も大部分の能格性分布域で欠如する。ただし、能格性の「西」分布圏では所有代名詞類が形成済みである。

現在性質形容詞の形成の一定段階を立証できるのは、能格性の「東」分布圏の若干の諸言語においてのみである。例えばユーロク語(アルゴンキン諸語の一)では20語以下であるが完成した性質形容詞(「大きい」「小さい」等また色を表すもの)が存在する。一方、

述語的にも限定的にも機能する圧倒的多数の自動詞（「受動的意義の動詞」も含めて）は、形容詞として用いる時には限定する名詞の類の違いに応じて形を変えるという。オジブワ語（アルゴンキン語の一）の場合はもっと形容詞の地位は安定しており、さらにサリナン語（北米）では歴史的な状態動詞に接頭辞 *k-* を付加することによって形容詞が得られるという（サビアによる）。ケイペル（A. Capell）によれば、ジワジャ語（オーストラリア諸語の一）でも形容詞として機能する語は純粋な修飾限定辞と動詞述語という二つの形式で現れるが、このような範疇が一定の独自の形態形成を行う限りは、動詞との交錯関係を認めつつも同範疇を認定することは妥当だとする：cf. *waliwai* *alidj*「悪い・槍」～*nuji annaliwi*「君は・悪い」。性質形容詞と動詞との連関を証するもう少し間接的な類似例は能格性の西分布圏にも残っており、例えばブルシャスキ語では形容詞は「いわゆる静態的分詞」の役割をもつ動形容詞（*герундий* [Gerundium]）と同じ派生接辞・*Vm* をもつ：*ūj-um*「大きい」、*mat-um*「黒い」等～*et-um*「為したところの」、*man-ūm*「なったところの」、*es-um*「言われたところの」等。タバサラン語の形容詞語尾は *-и*, *-уь*, *-у* であるが（*мини*「暖かい」、*аьхю*「大きい」、*уьру*「赤い」等）、これは「分詞的性格の動詞形の接辞として」も登場する。「これらは全て形容詞が動詞派生形容詞たる分詞に近いことの証明である」（p.173）。カツネリソンは「能格構造の動詞からの分詞の発生は必然的なもの」（p.174）という指摘を行っており、分詞は多くの能格言語ですでに完成済み語類である。この場合二つの基本特徴が存在する：① 原則として態（voice）の形の区別がないこと、② しばしば人称変化を示すこと。種々の副詞的分詞（*деепричастие* [adverbial participle]）の発達も広く観られる。分詞語形に人称と時制の指標を組み込むことは、それが動詞との密接な関係をもつことを示す。

所有代名詞。西分布圏では東分布圏に知られていない所有代名詞類が「多少ともできあがっている」（p.174）が、その点で興味深い状況が観られるのは分布域からすると「中間的なアブハズ語・アディゲ諸語」であるという：cf. アブハズ語 *са-с-ту* *Іы*「私の」、*уа-у-ту* *Іы*「君の」等⁶³。ただし、シャギロフ（A. К. Шагиров）の研究を参照して、これは現在限定機能ではなくて主として述語機能であるという。

態（voice）。能格構造の再編過程は結局のところ動詞の再編である、すなわち他動詞（能

⁶³ 基本的には人称・類別代名詞—長尾形 *сара*「私」、*уара*「君(男)」, *бара*「君(女)」... // 短尾形 *са*, *уа*, *ба*... 等—の語根要素 *с-*, *у-*, *б-* (+被限定語) によって所有を表す：*с-напы*「私の手」、*л-напы*「その者(女)の手」等。「独立した所有代名詞は人称・類別接頭辞を付し所有接尾辞 *-тәы* を接尾して作る。普通それは人称代名詞を伴う、最も多くはその短尾形を伴う・・・例 *с-тәы* // *сара с-тәы* // *са с-тәы* 『私の』等」—*Языки народов СССР, Том IV, Иберийско-кавказские языки*, p.111 (cf. 109 も)より。

格動詞)と自動詞(絶対動詞)間の語彙素的な質の再編、両者の対立原理の弱化である。能格性原理の劣化に伴って動詞の中に態の形態範疇を形成していく前提条件が整って来る。クリモフは能格性と態の形成の「反比例関係」をいう。態の形態範疇の形成過程は先ずは動詞の派生形に現れ (cf. 受動態の必要最小限要素としての受動分詞の定義)、次いで動詞自体の構造に浸透して行く、と説明している。態の区別は恐らく西分布圏にのみ認められ、また類型的に中間的なカルトヴェリ諸語やインド・イラン諸語では態は十分に発達した範疇であるが、同分布圏の他地域ではその最も初期の態形成段階が観られるに過ぎないという。その初期段階の例としてバスク語を取上げグフマン (M. M. Гухман) を引用する:「バスク語では態は明らかにロマンス語規範の影響下で[分詞形+助動詞 *izan*(=be)]から形成される」(p.175)。この場合の文法的主語は絶対格であり、受動の意義が現れるとされるとき分詞には定性指標 *-a* が付置される(cf. 次例 *egin-a*)。これは定性マーカー(*-a*) 付きの名辞(名詞、形容詞)形の形成手続きと同じものである。クリモフは後に「内容類型学の原理」において、ラフィット(P. Lafitte)が挙げた同分詞を含んだ文例—*Pierres-ek* (ピエール *erg*) *egin-a* (作る・完了分詞+*a*) *d-a* (3sg 主体指標 *d-* 語根 [*-a*]be) *etxe-a-ø* (家 *nom*)=「ピエールが家を建てた/ ピエールによって家が建てられた」—について、主格構造の中ではなく能格と絶対格からなるバスク語能格構造に態の対立を認定するのは、一体如何なる形態的(まして統語的)根拠に基づくものか不明だとして、これを受動構文とする解釈は「仮のもの *условность* である」と疑義を呈している⁶⁴。その

⁶⁴ Принципы..., p.104, cf. 『類型学研究』2号拙稿 p.78。[-*a* 分詞+助動詞]構文については、完了の意と受動の意義の有無を巡って研究者間で解釈が揺れているという。バスク語学者ラフィットが挙げた上例はこの揺れている構文例である。文成分は能格主語と絶対格(主格)補語を取るから能格文形式であるにも拘らず、助動詞に *be* 動詞を配する限りにおいて、これはバスク語の規範からすれば絶対構文(自動詞文)の合成述語である。したがって、これが受動文だとすれば、定性指標を付したことで分詞に受動態へ向けた再編過程が起っていることになる。なお、定性指標は次のように用いられる:「人」*gizon* (不定性 *sg*)//*gizon-a* (定性 *sg*), *gizon-a-k* (定性 *pl*); *gizon-a on-a d-a* 「その人・よい・です」。*on* 「よい」にも定性指標が見える。そこで上例 *egin-a* もまた *on-a* と同じく定性指標のついた分詞形である。スラヴ語の受動分詞生成過程にもまた形容詞指標 (**-t-o-*, **-n-o-*) が介在したことが想起される。

バスク語の動詞述語形は単純形と合成形—分詞+助動詞 (*be, have*) の合成—があり、単純形は今日ではすでに衰退形式であるという。また、その合成述語に供する三分詞(完了・継続・未来)がある。絶対構文(自動詞合成述語)=*izan* (=be)+分詞、能格構文(他動詞合成述語)=*ukan* (=have)+分詞: ①*ikusi d-u-t* 「私はそれを見た」=I have seen it; ②*ikus-te-n d-u-t* 「私はそれを見るく〜を視野(視界)の中にもつ」=I have it in sight。この場合の *ikusi* は完了分詞(過去分詞 *seen*)かつ動詞の原形(*to see*)の「二つの価値」(以下の下宮著 p.254)をもち、*d-u-t* は *d-*「それ/*nom*」-*u-*「もつ/語根」-*t*「私は/1人称主体指標 *erg*」。現在時制文の現在分詞 *ikus-te-n*=動名詞 *ikus-te*+内格 (*inessive*) 形-*n*。同様に主語 3人称ならば、「彼はそれを見る」=*ikus-te-n d-u-ø* (3人称主体指標はゼロ)。ところが *izan*(=be) 動詞を合成した絶対構文=*ikusten d-a* 「彼(女)/(それ)が見える/〜が視野(視界)の中にある」=*He(She, It) is seen* (cf. Он *виден*) あるいは *He(She, It) is in sight* (cf. Он *есть в*

他の例としてダルギン語クバチ方言(ナフ・ダゲスタン諸語の一): 能動態 *гIаче* (仕事) *б-икъузи-в* (するところの) *уста* (職人) と受動態 *уста-дил* (職人によって) *б-икъази-б* (なされるところの) *гIаче* (仕事) — クリモフは、「類別面で主体及び客体に一致する分詞は能動態に属し、客体にのみ一致する分詞は受動態に属する」(p.176) と解説している⁶⁵。

能格言語に最も典型的な動詞活用は、他動詞、情緒動詞の二重人称的な主体・客体活用、自動詞の単人称活用であり、ここでは類の区別はすでに動詞人称活用内部での区別である。これは能格言語の先行者たる活格言語にも立証される。純粋な類別活用原理はナフ・ダゲスタン諸語等にもみられる例外である。またアブハズ・アディグ諸語には動詞語形に四つ以下あるいは五つの共演項 (Aktant) の表示まで行う多重人称活用が観られるが、これは専門書では改新と看做されている。なお、「言語的現実には、動詞の類別指標を人称指標として再解釈していく過程は知られていない」(p.178)。したがって、アブハズ・アディグ諸語やカルトヴェリ諸語の動詞人称活用の起源を類別活用を求める推定は疑わしい。それどころか、形態的な類別範疇が消失していく過程が立証され、人称接辞内の類対立が次第に排除されていく限りにおいて、類別・人称活用原理は次第に純粋な人称活用原理に移行して行く。

アспект (動作態 Aktionsart) 対立から時制対立へ向けた形態構造の再編。これは能格言語の動詞形態構造の最も特徴的な発展法則であり、能格性の初動段階の言語すなわち活格言語との接点が大いほど能格言語の動詞活用におけるアспект対立の重要性が増す。逆に、能格性の遅い段階の言語では時階の対立の比重が増してくる。したがって、東分布圏の能格言語(多数の北米諸語等)と西分布圏の能格言語(バスク語、ナフ・ダゲスタン諸語、カルトヴェリ諸語等)は対照をなす。こうした関係は活格動詞と状態動詞の語彙素対立を他動詞と自動詞のそれへと再編して行くことに関連する。換言すれば、

виду. Он видится [в зеркале]) (d=「それ nom」; -a=izan[=be]の語根)。さらに方言には、この *ikusi* に名辞用の定性指標 -a を接尾して、これに助動詞を合成した *ikusi-a d-u-t=I have seen it* となる構文があるという。cf. 下宮忠雄著『バスク語入門』(大修館書店) pp.264-274, 311 他 — なお同著に収録される岸順子氏論文「バスク語動詞における定表現に関する一考察」(p.295-300)は、聖書のバスク語訳(ラテン語からの)資料に基づいて正にこの[定性指標付き分詞 + 助動詞]構文の動向を辿った論考。

⁶⁵ *б-икъузи-в* (分詞) には *б-III* 類 (その他類) 指標が接頭され直接補語「仕事」に一致し (objective conjugation)、接尾される *в* は *I* 類 (男性類) 指標で被限定語 *I* 類名詞「職人」に一致する (cf. *II* 類は女性類)。一方、「職人」*уста* を *уста-дил* に変形操作した上で「する」の語根 (*-икъузи-*) に *III* 類指標を接頭、接尾した分詞は受動分詞の萌芽とされる。なお、分詞のこうした形成法はアヴァール語にもある — *тIехъ* (本/*III* 類) *б-осаре-в* (買ったところの) *чи* (人/*I* 類) *в-ачIана* (来た) — が、受動分詞の形成過程があるか否かは本稿筆者には不明 (例文 И. И. Мещанинов, Глагол, АН СССР, 1949 [1982], p.49 [57] より)。なおダルギン語上例については、山口巖著『類型学序説』p.85 に詳説。

アスペクト対立は活格動詞と状態動詞の形態構造に特徴的であり、時制対立は他動詞と自動詞の形態構造に特徴的なのである。アスペクト範疇の弱化過程は能格構造の幾つかの随件事象例えば類別の弱化過程とも並行的に行われる（タバサラン語）。また動作態自体の機能的再編も、多くの能格言語に観察される。例えば、個別的な発展法則として、行為の集中・強意性（intensiveness）指標の多回性（iterativeness）指標への再編が挙げられる。またアブハズ語動詞では、初めは行為の量的側面を表した多回性が後に時間的持続性（延長性）を表すに至ったと推定されている⁶⁶。クリーヴーヴィチも、多回動作態＞持続動作態（現在時制）＞（一般ないしは不定）現在時制、あるいはまた願望動作態＞未来時制のような機能変化法則を提起している。さらに、諸言語におけるアスペクトと時制の形態範疇の比重の具体的諸例を挙げ、何れもアスペクト範疇＞時制範疇について、あるいはまた時制の発達過程について記述している。例えばオーストラリア諸語の「より初期の段階では未来と非未来の区別に重点が置かれ、後になって初めて非未来が現在と過去に分化した」（p.182）というケイペル（A. Capell）の研究を挙げて、こうした動詞語形における意図の表現と現在・過去の非弁別も活格言語の特徴である、と述べる。また「現代エジプト語の活用には 44 の常用動詞形と（6 の稀用）動詞形がある。アスペクトと動作態のみを表す形を V、時制を表す動詞形を V^m で表すと、V : V^m = 34 : 10 の関係がある。すなわち時制を表さない動詞形が時制動詞形の 3 倍多い」（p.183）というコロストフツェフの研究が紹介されている。加えて、現代グルジア標準語についても、「時制範疇によるアスペクト範疇の駆逐過程は今日も完結したものとは考えられない」（p.184）。

能格言語における曲用パラダイムの構成とその再編過程。能格性がすでに曲用が存在する環境の中で形成される場合には、当然そこに存在する格の一が能格性機能を表す。その場合、能格性を担う格が様々な言語毎に異なることもまた当然であって、それはその言語毎のパラダイムの特性に起因する。第一に、なかんずく能格性機能を担う格は具格あるいは所格である。こうした斜格から能格への再編過程の諸相は様々な言語に観察される。例えばオーストラリアのダラボン方言では接尾辞 -ji が主として具格機能であるのに対して、その別方言ではすでにこれが能格機能で常態化している。第二に、言語によっては、活格の能格化過程も観られる。第三に、属格や与格が能格機能を担う言語がある（カフカース諸語やインド・イラン語）。このように、能格性の生成過程は曲用の形

⁶⁶ ここではクリモフは具体例を挙げていないが、『新しい言語類型学』（三省堂）にも多数の例が挙げられている。また例えばドブレフは、印欧語の過去に集約・集中・強意性＝反復・多回性＝持続性が同一指標 H₂（ラリンガル）によって表された例を挙げる：「引く、引き出す」＞「育て上げる、教育する」等々－I・ドブレフ『古代ブルガリア語文法』大阪外大学術研究双書 § 17。

成と並行して発生してくる一方、能格機能は斜格一般が担うことになる。何れにせよ、「兼務」能格 («совмещающий» эргатив [«combined» ergative]) の存在は相対的に初期の能格段階に属し、また専用能格 (специальный эргатив[specialized ergative]) は遅い段階の特徴であり、専ら西分布圏の能格言語に限られる。この場合、能格形の素材として兼務能格すなわち斜格形 (レズギン諸語の語尾-di とその変異形) を、また特別な代名詞語基(古代グルジア語・man)を用いるケースが知られている。インド語史、イラン語史資料ではそれぞれ具格と属格の形が能格形に用いられることを証明している。また共通カルトヴェリ語段階に兼務能格・状況格 *(a)d を再建できるが、カルトヴェリ諸語の専用能格形 (グルジア語・man、チャン語・k、スヴァン語・em) は「極めて遅い時期に形成されたもの」(p.187)である。ナフ・ダゲスタン諸語の専用能格も相対的に遅い時期に形成されたもので、大多数の場合起源の異なる素材を使っているが、兼務能格・具格*d(i)の方は太古の時期に遡すべき重要な証拠もある。兼務能格が機能する場合、能格を兼務しない斜格が並行して機能する傾向も窺われる。ボカリョフ (Е. А.Бокарев) によれば、「能動格と具格が同一格として合一するダゲスタン諸語全てにおいて、能動格と合一せず大多数のケースで通常の道具手段を表すもう一つの具格が存在する。例えば第二具格としてレズギン語 (-лди)、ダルギン語 (-чибли)、ラーク語 (-йну, -х) では異系列の所格が使われ、アヴァール語では起源的には副詞的分詞(副動詞)に遡る形-лъун が使われる。第一具格の主語としての使用が、道具手段を表す新しい手段を求めさせたのである」(p.187)⁶⁷。専用能格と兼務能格の相関関係の動態には興味深い法則性があるが、多くの場合両能格は共存しており、その共存の事実そのものは歴史的な活性類と不活性類の区別を代償的に現象化したものと見ることができる。専用能格は活性類名詞に相関し、兼務能格は不活性類に相関する。このことは真の行為者として登場し得るのは活性類名詞(人間と動物)だけであり、その他残余のものは全て行為手段として以外は機能し得ない、という客観的現実を表している。こうして相対的に遅い時期の能格言語では、活性類の方は「他動的行为の主体の単一格として専用能格の役割で曲用パラダイムの中に一般化して行くという傾向」(p.188) が現れて来る。さらに最終的には専用能格の格語尾は、

⁶⁷ cf.カルトヴェリ諸語曲用若干—グルジア語曲用例 (cf. 註 7); チャン語 (ラズ語) kōči (nom), kōčik (erg),... k očite (instr); スヴァン語 I 曲用「犬」žey (nom), žey-s (dat), žey-d (erg)...// II 曲用 žey (nom), žyw (dat), žayw-em (erg,gen); ナフ・ダゲスタン諸語曲用若干—レズギン語「父」буба (nom), бубади (erg), ... бубада (locative IV), бубада-лди (directive V); ダルギン語「牡牛」уңц(abs), уңц-ли (erg),...уңц-ли-чибли (instr); ラーク語「労働者」зузала(nom), зузалал (erg-gen),... зузалайну (instr) 等々。Языки рос. фед..., I, II, III, Наука, 1997-2005; Иберийско-кавказские языки, Наука, 1967 による。

多くの能格言語で本来曲用を欠く 1, 2 人称の人称代名詞にまで波及していくことになる。専用能格と兼務能格のこうした相関関係を示す例としてナフ・ダゲスタン諸語北部圏の専用能格-(a)s、兼務能格-w の相関関係がある。-(a)s 能格の使用が最も広がるバツ(ビ)語では人間、動物以外の幾つかの事物を表す名詞にまでそれが及ぶのに対して、チェチェン語、イングーシ語では I 類(男性)、II 類(女性) 名詞と人間を表す若干語に限られる。別言すれば、兼務能格の機能範囲はチェチェン、イングーシ語の方がバツ(ビ)語よりも広いことになる。またアヴァール語では-(a)s 語尾能格は最も限られた範囲の名詞すなわち男性類 (I 類) 名詞に限られ(vac-as 「兄弟」, nart-as 「犬(トナカイ)橈」, do-s 「彼」)、女性類 (II 類) は別の専用能格語尾-al'をとり、さらに「歴史的な兼務能格語尾-(i)ca の一般化過程は相当深く進行し、今日この語尾は第 I 類名詞にまで浸透している(insu-ca「父」, Rašid-ica 「ラシド(人名)」)⁶⁸。この過程の最終結果は他のナフ・ダゲスタン諸語ーレズギン語ーに存在しており、歴史的な兼務能格-di はすでに今日実質的に統一の専用能格の役割を果している。この点で若干独自の発展を見せるのはスヴァン語であって、ここでは兼務能格・状況格 -d と並んで専用能格 -em も存在するが、-em 語尾の適用範囲は現在では単数の普通名詞と代名詞に限られる」(p.188-189)。

能格が主格に転換して行く過程の例証として、既述のグルジア語能格式構文「子供が走り回った」bavšv-ma (erg< bavšv-i[nom]子供) i-rbin-a (aor/3/sg 走り回る) を挙げる。この場合の能格はすでに形骸化しており「主格の変種の地位を獲得している」(p.189)ことになるからである。しかし、「こうした場合でも人称代名詞はしばしば最も保守的な語範疇である」(p.189)。この点についてもクリモフは再三言及しているが⁶⁹、ここでは、多くのイラン諸語、ダルド諸語では人称代名詞の直接格と斜格の区別を補充法によって表すということ自体がこれを傍証する、という指摘を行っている。また「絶対格の機能的『拡散性』«diffuseness»が目につくが、これは恐らく主格言語に特徴的なパラダイムを形成して行く上での一定の段階を表したものであろう。・・・形式と内容の・・・弁証法的な関係を考えれば、絶対格の存在はすでに対格形成へ向けた一步である」(p.189)。さらに、属格や与格は遅い能格性段階に現れる格構成であり、ほとんど専ら西分布圏の能

⁶⁸ cf. アヴァール語曲用若干：「兄弟」v-ac(nom) > vac-as (erg), 「少年」v-as > vas-as, 「姉妹」j-j-a-c(nom) > jac-al' (erg), 「少女」j-as > jas-al' (v-, j- はそれぞれ I 類[男性]、II 類[女性]の接頭辞)。「父」emen (nom) > insu-ca(erg), 「ラシド」Rašid > Rašid-ica。指示代名詞「それ」I 類 dov (nom), dos (erg), II 類 doj (nom), dol' (erg)。グルジア語 1/sg 人称代名詞「私」me, 2/sg 「あなた」šen は基本的には曲用せず、主・能・与・属格は同形, 3/sg 指示代名詞「彼、彼女、それ」is/ igi (nom), man (erg), mas (dat), mis (gen), mit (instr)。

⁶⁹ 例えば Принципы ..., p.130 ; 『類型学研究』2 号拙論 p.86

格言語に見られるにすぎない。これ等両格は主体・客体原理が確立していく主格言語の包含事象であること (cf. 主格と対格の転置としての属格、主体の与格と客体の与格)はクリモフがすでに再三指摘して来たことである⁷⁰。両格は、「実質上主格化されたカルトヴェリ諸語」や「能格性規範を貫徹しないインド・イラン諸語」は勿論、バスク語、ナフ・ダゲスタン諸語、フルリ・ウラルトゥ諸語に観られる。また属格形成の過渡的段階位相の例として西アジアの古語シュメール語とブルシャスキ語があるが、前者では与格は活性類名詞に限られること、後者では属格は第Ⅱ語彙類の名詞だけにあり⁷¹、与格機能はまだ方向格によって代替されること、「両格の最も東の拡大限界域」は幾つかのチベット諸語であること、他の能格分布圏では別手段で両格の機能を代替すること、が指摘される。さらに、属格、与格専用形のパラダイム化は兼務能格特に能格・一般斜格の段階を経由するという：アヴァール語「兄弟」*vac-as (erg) ~vac-as-ul (gen), vac-as-e(dat)*；レズギン語「父」*buba-di (erg) ~buba-di-n (gen), buba-di-z (dat)* の形態にそれが露出している。そして最も一般的なケースでは与格は所格の一つー普通は方向格ーをベースにして形成されたものという⁷²。

格パラダイム化の歴史において最も遅い段階は主格と対格の形成段階であって、これ等は互いに並行して形成されて行く。「発展経路は然るべき機能を『兼務』する格の発生を経由することを証明する。この場合、形成される格は内容面でも表現面でも格の有徴性と無徴性間の同型性 (isomorphism) を保持しようとする一般的傾向に起因する興味深い構造的進化を経る」(pp.190-191)。主格は主体機能を獲得した絶対格あるいは能格をベースにして形成される。最も一般的なケースでは主格の構造的基礎になるのは絶対格であるが、歴史的な能格もその機能的再編によって主格機能を獲得して行く。「表現面で有徴的な能格は、専用的な格語尾を次第に消失することによって形成されて来る主格の内容面での無徴的性格に合せようとする明確な傾向を見せる。語史上当初は定性指標の機能を兼務していた絶対格指標*-i* が形成されたカルトヴェリ諸語にはこの過程の興味深い例証を見出し得る：主格の生成に連れてこの指標は完全消滅の過程に向う。・・・ここ

⁷⁰ 『類型学研究』2号拙論 pp.63-64；Принципы ..., pp.45-50

⁷¹ ブルシャスキ語の名詞類は4類構成：Ⅰ類男性、Ⅱ類女性、Ⅲ類生物他若干事物、Ⅳ類その他となるが、事物類はⅢ、Ⅳ類間に配分され、Ⅰ類には果物、樹木の部分、木材製品、宇宙自然現象、液体、樹木、金属等々雑多なものが属するとされる。—Г. А. Климов, Д. И. Эдельман, Язык Буршаски, Наука, 1979, p.37による。

⁷² 「所格の一つ」というのは、これ等諸語では所格(*loc*)が機能別に多岐に分かれており、例えばアヴァール語では形態的に5系列に分かれ、さらに各系列が4つの格形を含むという構成をもつからである。cf. Самоучитель аварского языка, Махачкала, 1996, pp.33-35

ではこれと並行して歴史的な与格をベースにして内容面でも表現面でも有徴な-s 対格が形成される」(p.191)⁷³。印欧語の歴史的な格語尾-s (かつての能格機能ないしは活格機能をもつとされる)の運命についても、この一般法則によって説明できるのであって、「より古い時代には-s 格が能格すなわち行為主の表示機能を負った有徴格であるのに対して、-s なしの格は表現面でも内容面でも無徴なのであるから、行為主の表示の欠如だけを表した」(pp.191-192) という有徴能格と無徴絶対格の関係は主格言語の機能に合せてそれぞれ無徴主格と有徴対格の関係に転換して行ったとするマルティネの説明を挙げている。これはつまり形式と内容の弁証法的な関係である。対格の形成過程でも二つの基本路線が指摘できる。一つは斜格の何れか(普通は与格ないしは与格・方向格)を機能的に再解釈する路線、もう一つは代名詞語根の一つ(これは行為客体の行為主体との近接度を指示する)をベースにして専用の対格語尾を形成して行く道である。「両方の場合とも、形成されて来る格の表現面での有徴的な性格は内容面でのこの格の有徴性に合致している」(p.192)。この対格形成の例証として、カシミール語では他の多くのダルド諸語におけると同様、その基本機能を方向格とする「第一斜格」を基礎として発生してくるのに対して、カルトヴェリ諸語では与格を基礎とする(-s 格は与格・対格機能を兼務する)。とりわけ「最も主格化路線を進めた」メグレ語(カルトヴェリ語の一)では対格に二つの異形態――一つは-s 格を、もう一つはゼロ絶対格をベースとしたもの――の生成がある。

ここで「若干の総括」として、次の諸原則に言及している：第一は、「有生類名詞の形すなわち真の行為主の役割を演じ得る指示対象を表す名詞の形と真の行為を表す動詞の形」(p.195-196)こそが、能格言語の文法構造の発展において主導的な役割を果たすこと、それが次第に残余の名詞、動詞に広がって行くが、その過程の背後にあるのは主体・客体的決定因子の地位の増大、活性・不活性的決定因子の地位の弱化であること。第二は、能格構造の諸側面の進化方向とテンポは一樣でないが、その包含事象は言語構造のより高次階層から低次階層(すなわち語彙→統語→形態)へと波及して行くこと、第三に、能格性の「西」分布圏と「東」分布圏の対立は、改新地帯と保守地帯の対立であること、またその改新の本質は主格構造への接近性であること。

第4章 能格構造の起源によせて

先ず研究初期のこの問題に対する過去の多数の研究者等の取り組みの傾向として、次

⁷³ cf. グルジア語名詞曲用一子音幹 *çign-i* (nom/abs), *çign-s* (dat)、母音幹 *ena-ø* (nom/abs), *ena-s*(dat)―には対格という名称の格はないが、与格が直接、間接客体(補語)を兼務する。

の二点が指摘される：第一に、能格構造の起源問題＝能格構文の起源問題であったこと、第二に、起源解明の鍵を言語の構造的要因外に求めたこと、すなわち直接「人間の思考の分野なかんずく歴史的な社会的意識規範に問いかけること」(p.205)。能格構文が主語を斜格におくのは、原始言語の担い手の思考がトーテム的な「隠れた力」の支配下にあるからだ、というレヴィ・ブリュール (Lévi-Bruhl) の能格構文「神話的」起源説はその典型であるが、これは能格構文受動性説と一体となってユーレンバクを含めて当時の研究者多数の共鳴を得たものであった⁷⁴。カツネリソンが、「統語構造に原始的世界観の幻影的な様式の直接的反映を見るこの仮説は全てがこじつけである」(p.208)、と批判したのは当然である。そしてこのカツネリソンこそ「類型的再構による能格文モデルの原型追跡の路線」(p.211)を示して、この「困難な状況からの脱出に多大な貢献をなした」(p.211)のであった。クリモフもまたその路線を引き継ぎ、能格構造の動因子を演繹によって直接的に言語外に求める手法を排して先ずは言語構造そのものの中にこそこれを立証しようとしたのである。

統一的な統語組織としての能格性、主格性を比較すれば、「能格構造言語と主格構造言語の担い手の思考の発達レベルの違いを論証することはできずとも、両文類型の一定不変の連続性を示す可能性は出て来る」(p.212)のであって、能格的文類型から主格的文類型への再編事実は明示できること、また主格構造の能格化の確かな先例は皆無であること、が先ず指摘される。しかし、起源問題の解決にとって特に重要なのは能格構造総体と活格構造総体との比較・類型的分析だとする観点から、活格構造をその語彙、統語、形態レベルそれぞれについて通観している。この内容は本書の四年後（1977）に上梓された「活格構造言語の類型学」⁷⁵にほぼ再録され、しかもその基になった記述である。活格構造それ自体については同著（1977－邦訳 1999）に詳説されているのであるから、ここでその構造特徴を逐一解説する必要はなかろう。クリモフも、語彙、統語、形態に亘る活格構造組織の諸特徴（包含事象）を概括してから、これ等の諸特徴－「動態動詞 (dynamic verbs) と静態動詞 (static v.)」そして情緒動詞という非生産的な動詞群の区別、それぞれの指示対象の活性・不活性特徴による名詞の二項分類（あるいはその分類の改新）、動詞における二系列の人称接辞の機能化、共演項 (Aktant) の単数性・複数性による動詞語根の補充法、有機的所有と非有機的所有の所有形の対立、複数 1 人称代名詞語彙素における内包形～排外形の対立、他多数」(pp.226-227)－が能格構造諸言語に散在し

⁷⁴ cf. 「訳者あとがき」『新しい言語類型学』（三省堂）p.265。

⁷⁵ 邦訳版は、『新しい言語類型学－活格構造言語とは何か』（三省堂, 1999）として改題。

ていることを先ず指摘する。そして「諸言語に亘って対比される諸特徴の類似的な分布そのものが統一的な組織体系としての活格構造と能格構造間に継承的な関係があり得るという想いを抱かせる。ところが、それにもまして言語進化の方向を示唆するのは、能格構造が形式面で活格構造との多数の共通性を分ち合いながらも、それはすでに主格構造が特に定立する関係の表現に同調している、という点である」(p.227)。また、ユーレンベク初めビホフスカヤ、メッシュャニーノフ、サフチェンコ等多数の研究者が確認したように、「『類稀なほど』*«на редкость»* 確定した」(p.227) 事実としての活格動詞～状態動詞の対立から他動詞～自動詞の対立への歴史的継承関係も、さらに活格動詞遠心形から他動詞へ、活格動詞求心形から自動詞へという起源的関連性も明白である。能格言語の動詞の絶対格系列接辞と名詞絶対格の機能的な「拡散性」*«диффузность»* [diffusiveness]—行為主体も行為客体も指示するという不安定に見える振る舞い—は「能格論にとって最も複雑な問題の一つ」(p.230)であるが、これも能格構造が主体・客体原理ではなく活性・不活性原理に定立する活格構造の継承であるという前提に立てば、動詞絶対格系列接辞及び絶対格の「拡散性」も不活格系列接辞あるいは不活格の継承すなわち不活格の歴史的再編として説明できるのである。「以上のことは、活格構文の能格構文への主導的な再編メカニズムはその内容面に求めるべきであること、また再編メカニズムはすでに形式的に存在する構造の再解釈に帰せられるはずであること、を証明する」(p.230)。活格構造から能格構造への再解釈過程という進化の見通しには、①能格構文を活格構文へ変換して行く先例は皆無であること(しかも能格性包含事象を消失しつつ主格化特徴を増大させていくこと)、②活格構造組織の「自然な (spontaneous)」能格化 (p.231) の歴大な証拠群が存在することから、「経験実証的な (empirical) 裏付け」(p.230) もある(例えばエラム語、北米諸語、印欧語、チュルク諸語等々)。

そこで、活格構造の残滓と見られる歴大な事象群を具体的に追っている。ここでこれを逐一再説する余裕はないので、重点的にのみ拾っておく。先ず、可変動詞 (diffused v./labile v.) 群について：これは「非態的な性格のディアテシス (「殺す」～「死ぬ」型の) を広く利用する活格動詞の『不安定性 lability』の直接的継承である。・・・この動詞群は活格動詞の残滓動詞群であって、未だに他動性～自動性特徴による区分原理によって語彙化されていないものである」(p.234)。活格言語からの継承としての、情緒動詞群、活性類名詞あるいは不活性類とのみ結合する動詞群(ブルシャスキ語「(人、動物を)殺す」～「(木を)伐採する」；アブハズ・アディゲ語の有生運動動詞～無生運動動詞の別も)等の記述に次いで、特に多数の具体例を引いているのは、能格系列接辞あるいは能格と自動詞

の結合例である。チュクチ語 **ты(erg)-чейвы-ркын**「私が歩く」(cf. **ы-чейвы-й-гым(abs)**「私が歩く」)。またバツ語(ナフ・ダゲスタン諸語の一)では、運動自動詞現在時制で単数 1, 2 人称代名詞主語に対して絶対構文が原則であるが、その運動行為が能動的な不随意的かによって能格にも絶対格にもなる「若干の自動詞」(p.235) があるという⁷⁶。レズギン語(ナフ・ダゲスタン語の一)の運動動詞 (*verba mobendi*) やカバルダ語(アブハズ・アディゲ語の一)の自動詞、カルトヴェリ諸語でも自動詞に能格を置く構文が見出される: グルジア語アオリスト時制で「歩いた」「走った」「泳いだ」「跳んだ」「飛んだ」「這い回った」「泣いた」「笑った」等々の多数の「能動的自動詞」が存在し(cf. *deda-m itira*「母が(erg) 泣いた」, *bavš-ma irbina*「子供が(erg) 走った」)、さらに他のグルジア方言とりわけ西グルジア方言ではこの動詞規模はさらに広がりを見せ、またメグレリ語でも事情は同じである。勿論、これらは全て活性類名詞が表す共演項に固有の運動、発言、情動等を表すかつての活格動詞の継承として説明できる⁷⁷。ここでクリモフはこれ等の事実について次のように解説している: 自動詞述語下での能格主語が活格の残滓だとする「説が正しいとすれば、活格主語の多数の特徴を残し、かつまた特にかなり多数の自動詞(動態動詞 *dynamic v.*)下で能格主語の使用を未だに残す能格構造段階位相の多数の言語史において、絶対格ではなくて正に能格こそが主格への急速な (*скоротечность* [transiency]) 機能的再編を遂げるケースという説明が可能となる。恐らく、活格構造、能格構造、主格構造の特徴の共存として実現されているカルトヴェリ諸語の構造的な『多段階性』の事実そのものがすでに、ここでの能格性の機能化が短期的であることを裏付けけることになる」(pp.238-239)。名詞組織についていえば、上述された絶対格の機能的「拡散性」が不活格の歴史的再編、再解釈過程として説明されたのと同様、「行為主体の普遍格でない能格の独自の機能的負荷」内容も結局は「活格の歴史的連続・継承としての姿を曝している」(p.241)ことになる。さらに名詞曲用組織での二つの能格、二つの絶対格の存在について言及し、それが活性類名詞と不活性類名詞に遡及する区別の残滓であることを指摘する: 二つの能格はナフ・ダゲスタン諸語、チュクチ・カムチャッカ諸語、オーストラリア諸語に残り、また二つの絶対格はオーストラリアのアランタ語に観られ

⁷⁶ この種の例はキブrikも活格、能格言語の多様性を示すために挙げる(А.Е. Кибрик, *Константы и перемены языка*, Алетейя, 2003, p.132; 同 *Очерки по общим и прикладным вопросам языкознания*, Изд. Мос. ун-та, 1992, pp.206-207, 208)。

⁷⁷ [能格+自動詞] 結合例にはその直接補語の消失によって生じた「少数のケース」の存在も認めている(pp.237, 239)。

る(活性類名詞絶対格-na ~ 不活性類絶対格-o)⁷⁸。そして「正に二つの客体格の特徴をもつ言語構造こそが印欧語組織の史的・類型的再構の原点となるものであって、同組織には活性類名詞と不活性類名詞の客体形の区分が見事に追跡される」(pp.241-242)というカツネリソン説を紹介している。その他、活格言語の継承として説明できる諸事実—多数の能格諸言語における名詞数範疇が欠如するか弱体であること、多くの場合その数表現の機能は動詞の語形が担うこと、未だに有機的所有と非有機的所有の所有表現を遺す多数の能格諸言語—を指摘し、能格構造の随件事象は「原則として活格構造の包含事象に合致するという結論」(p.243)を述べる。そこで、この活格構造の包含事象の保存程度と主格構造への切替程度に応じて、能格諸言語は二つの分布圏—改新地帯としての「西」分布圏と保守地帯としての「東」分布圏—に分れる。以下の表が掲げられる：活格性の包含事象(能格性の随件事象)の存在+；その事象欠如—；過去におけるその機能化の痕跡(+)を表す(p.244)。

言語	可変動詞	名詞類別	非有機的所有 有機的・	内包形・排外形	言語	可変動詞	名詞類別	非有機的所有 有機的・	内包形・排外形
アラント	+	+	+	+	バツビ	(+)	+	—	+
ツィムシアン	+	+	+	—	チュクチ	+	(+)	—	—
チヌーク	+	+	—	+	アディゲ	+	—	+	—
フォクス	+	+	—	+	シンディ	(+)	—	—	+
ブルシャスキ	+	+	+	—	アリユート	+	—	—	—
アプハズ	+	+	—	+	スヴァン	—	—	—	—
ボング	+	—	(+)	+	レズギン	—	—	—	—
ダルギン	+	+	(+)	—	バスク	—	—	—	—

ここでクリモフは能格構造に継承される活格構造の二大事象群を次のように指摘する：①機能的に再解釈され、能格構造の原理に適應してその包含事象として有機的に組み込まれていく安定的な事象群（他動詞と自動詞の対立、動詞活用における能格系列の

⁷⁸ 後にクリモフは『内容類型学の原理』において、この事実に関連してディクソン批判(cf. ディクソンがオーストラリアのディルバル語に統語面では能格性、形態面では主格性を見る根拠となった1, 2人称代名詞-o~naの対立=主格・対格の対立という主張に対する批判)をおこなっている。(cf. Г. А. Климов, Принципы..., pp.128-131; 『類型学研究』2号 拙論 pp.85-86)

絶対格系列の対立、名詞曲用における能格と絶対格の対立、能格構文と絶対構文の相関性)、②すでに能格構造内ですでに存在理由を失って衰退・消滅して行く事象群(名詞の類別、可変動詞と状態受動動詞、複数1人称代名詞の内包形と排外形の対立、有機的所有と非有機的所有の対立等)。勿論、活性・不活性対立を中和する場合の「代償」措置として二つの格形の並行的機能化として生き残る等のケースについても指摘される。

一方、能格言語を主格言語に接近させる基本的構造特徴として、動詞の他動性～自動性特徴—ただし他動詞の形態範疇としての態 *voice* の成熟度が弱体であることは「輪郭を顕しつつある能格構造の歴史的地位とよく符合する」(p.245)—と直接補語と間接補語の存在を挙げる。勿論既述のように、クリモフは「内容類型学の原理」において、能格言語に機能する動詞の語彙化原理を他動詞～自動詞から *agentive verb*～*factitive v.*に、またそれに対応して直接補語と間接補語から「直接」補語と「間接」補語に修正・精密化することに留意しておかなければならない。この修正・精密化の内実を本稿筆者の言葉で単純化してしまえば、強他動性動詞～弱あるいは非他動性動詞の別であり、したがってこうした性格の動詞述語の支配を受ける補語もそれに相応した性格をもつ、ということになるであろう。つまり能格言語の担い手の意識規範から見た「他動性」の強弱である。そうであれば当然、主体・客体原理そのものに連係する他動詞～自動詞ではないが、そこには主体・客体原理へ向けた一定の前進面が窺われることになる。そこで、クリモフは「能格性は活格構造主格化の第一段階位相である」(p.246)、能格構造は活格構造と主格構造の中間的地位を占める、と述べる。それ故にこそ活格構造から主格構造への移行状態は決して一様ではなく、活格構造よりの諸特徴をもつ北米、南米諸語、アブハズ・アディゲ諸語に対して、カルトヴェリ諸語、バスク語等は主格構造への接近を示すというように、能格構造諸言語には程度の差こそあれ、活格構造と主格構造間の過渡的な段階位相の偏差を現象化した多用な構造諸特徴が際立つのである。クリモフは、活格構造と主格構造が構造内的論理的な完成度特徴をもつものに対して、能格構造はかなり矛盾した輪郭特徴を呈する、という点を指摘する：「活格構造も主格構造も構造内的な完成度特徴をもつだけでなく・・・多少ともはっきりと両言語の担い手等の一定の『意識規範』に合わせた、ある意味での言語の『安定』[stationary]状態と見てよい」(p.246)；「活格構造と主格構造は一定の内的な論理的完成度をもつ」(pp.246-247)のに対して、「能格構造はかなり矛盾した輪郭様相を呈する」(p.247)；「能格構造の矛盾は・・・活格構造と主格構造の構造的特徴の結合にあり、それは具体的な諸言語毎にある時は鮮明にある時は不鮮明に現れる」(p.247)。カルトヴェリ諸語の「多段階性」もまたその例証である。ここでは構

造の主格化がかなり深く進行するが(cf. 名詞自身及び統語的に名詞と結ぶ品詞の形態的類別範疇の欠如、動詞構造における主体系列・客体系列人称接辞、能格機能と絶対格機能の混淆、他動詞における態対立、真の分詞の存在等)、一方では能格構造の目立った特徴を遺すもの(特にチャン語)、また活格構造の諸特徴を遺すものがある。したがって、カルトヴェリ諸語の能格性は一過的で長続きしなかった(скоротечность[transiency])と見るかあるいは必ずしも同諸語全体を席卷した訳ではないと結論するか、これは今後カルトヴェリ学が直面する課題だと述べる。そこで、かつてカツネリソンが示した現実的能格性＝古態的能格性と残滓能格性があらためて意味を帯びて来るのであって⁷⁹、残滓能格性(カルトヴェリ諸語やバスク語等)は古態的能格性(今日から見れば活格性)の「風化」形式だ(p.249)というカツネリソンの主張も活格構造と能格構造間に仮定される起源的相関関係を想定したものである。尤も「活格構造を専ら前能格構造とだけ位置づける誘惑は自制しなければならない」(p.248)。つまり圧倒的多数のケースでは発展の順路は活格構造→能格構造→主格構造というものであるが、前主格構造つまり活格構造→主格構造への直接的な移行を観ることも可能であって、印欧諸語、アフロ・アジア諸語、ドラヴィダ諸語、エニセイ諸語等は正にこの発展経路を辿ったと考えられ、この場合、この直接的発展経路の最適条件は動詞の単人称活用原理であるとも述べる⁸⁰。また、「能格性の機能化は現代の能格諸言語に度々現れているように、活格構造の進化と必ずしも関連しているとは限らず、幾分その内部形式の不透明性(つまり能格構造が相対的に不安定、脆弱な環境—石田)がこのことを促すことがある。おそらくインド・イラン諸語の歴史が証明しているように、『残滓』能格性はある程度言語接触の要因が働く環境でも形成され得る」(p.249)ことも付言している(この点については再度後述)。そこで、このように構造的再編の方向性から観ると、過去にはもっと多数の活格言語、能格言語が広がっていたはずだ、という結論に至る。例えば「イリッチ・スヴィティッチ (В. М. Иллич-Свитыч) が旧世界の六大語族(アフロ・アジア、カルトヴェリ、印欧、ウラル、ドラヴィダ、アルタイ語族)に対して推定するノストラ語族という状態の構造的輪郭は、活格構造の少なくとも幾つかの包含事象を顕している」(p.251)。

以上のように、構造自体の再編過程は明らかである。しからばその再編の起因子は何か、という問題に移っていく。能格構文の定義が可能なのは専ら深層的統語構造のレヴ

⁷⁹ cf. 『新しい言語類型学』(三省堂) pp.19,34.

⁸⁰ 『活格構造言語の類型学』でも単人称活用原理説が展開されたが、「内容類型学の原理」ではこの構想を修正している。cf. 『新しい言語類型学』pp.161, 185-186; 「類型学研究」2号 拙論 p.54 —Г. А. Климов, Принципы..., pp.202-203

エルにおいてただ、という一事を採り上げただけで、能格構文は結局その言語の担い手達の「意識規範」に起因するという結論に至らしめる：「能格性の歴史的解釈に際しては、純構造的アプローチの枠を越えて、言語構造に対して外的な発展要因に問いかけることを余儀なくさせる。この場合、言語構造の進化における意味的決定因子の規定的な役割を強調する必要性が益々明らかになって来るのであって、何よりも先ずこの決定因子を介してこそ思考の言語構造に対する影響が実現されるのである」(p.252)。「したがって、活格構造の能格構造への変換あるいはまたその直接的な主格構造への変換を決定する因子も、結局は思考分野に求めるべきだという点は疑うべくもない。活格動詞と状態動詞の再編、活性名詞と不活性名詞の対立の形成とそれに続くその排除等は、恐らく言語の意味的決定因子自体の再編の直接的な結果と看做せよう。・・・活性(有生)原理と不活性(無生)原理を対置させる決定因子に代って登場して来るのが、主体原理と客体原理を対置する新しい決定因子である」(p.253)。そして、意味的決定因子の交替は先ず語彙組織の再編に及び、次いで言語構造のより低いレベル(統語→形態)へ波及して行く。また一般に言語の形式面は内容面に遅れてこの波及効果を受ける、これがすなわち形式と内容の弁証法的矛盾を生み出すことになる。しかし、「決して機械的な変換形式を取らないこうした決定因子の再編過程の複雑さを強調しておく必要がある。非常に多様な能格構造言語があるという事実が二つの決定因子の闘いを見事に例証している」(p.254)。「かなりの部分のインド・イラン諸語史に発生したような、すでに形成済みの主格類型に二次的に能格化が起る幾つかの先例」に見られるような「進化は、多少とも一貫した能格構造での帰結としてではなく、したがって袋小路 (тупик) 的なものとして特徴付けられるものであって、もはや『意識規範』の交替に起因するのではなくて幾つかの好都合な分布圏環境の中で起り得たことである」(pp.254-255)⁸¹。

何れにせよクリモフの起源仮説は、能格構造を「構造的法則性そのものの所産とするテーゼとは意見を異にするものであって・・・言語外的な被制約性を見ていた過去の研究者等の考えの軌道にある。ここに提起した仮説は、言語構造は結局は一定の内容的刺激動因によって決定されとする立場を具体化したものである」(p.255)と、あらためて明言している。ただし、誤解してはならないが、クリモフは、活格言語あるいは能格言語の担い手の高いあるいは低い思考発達水準とか「前論理的性格」とやらを主張している

⁸¹ 本稿筆者には、ロシア語史に見られる「先祖がえり現象」(山口巖教授)にもこうした説明が可能かと思われる。ところで、インド・イラン諸語については『内容類型学の原理』での記述とは幾分ニュアンスに差異があるが、門外漢の本稿筆者にはコメントできない。専門家の評価を俟ちたい：『類型学研究』2号 拙論 pp.100-101—Г. А. Климов, Принципы..., pp.191-194

訳ではない。「言語に関してなされるのと同じ様に、思考構造を幾つかのレベルに分割するとすれば、せいぜい思考の個別的側面の発達程度について示すことができるに過ぎないだろう。恐らく大多数の個別的なパラメーターに関しては、現代の諸民族—いわゆる『未開』民族も『文明』民族も—の思考は同等であろう。・・・本書に引く資料は、本質的には思考の一要素—言語の意味的決定因子—に対してだけ関係するものである」(pp.255-256)。「段階性問題を積極的に解決して行こうという、過去に再三行われた試みが失敗したからといって、そのことが言語進化の基本路線の段階的時代区分が可能だという考えそのものを失墜させた訳ではない・・・。それどころか、思考が言語に対して演じている主導的な役割の観点からすれば、いくつかのタイプの言語構造に『意識規範』分野での一定の対応関係を探ることは、方法論的に正当なものであると考えられる」(p.258)。

この点に関連して、アルパートフ論文(「言語学の諸問題」誌 '09/ №3)が指摘するクリモフ評は次の点で不正確であることを指摘しておきたい：①本書の以上の記述からもまた同様の趣旨の「活格構造言語の類型学」(第5章)の記述からも判るように、クリモフは思考の「高いあるいは低い段階」を主張したことはないこと、②論拠も示さずに段階性を主張すること自体が誤りだといわんばかりの批判は「ある種」の先入主に因るといわざるをえないこと⁸²。

最後に付言すれば、本稿筆者から見れば、現在活躍中のロシア類型論の雄たるキブリクの主張「従来の『能格構造』という既定概念は能格構造をもつ全ての言語の原理的な統語的類似性を前提としているが、これは実経験的に自然言語諸資料の検証に堪え得ない」⁸³、という能格言語の多様性認識は、結局は、言語事象の歴史的見通しと弁証法を破棄して共時的断面だけに焦点を絞れば、統一体としての類型像は砕けて多様性だけが映じるからだと思われる。キブリク自らが設定した *Agens* と *Patiens* の枠を越えて機能化するという述語の項 (*argument*) のハイパー・ロール (*гиперроль*[*hyperrole*])⁸⁴についていえば、能格言語の *hyperrole* である *Factitive* の場合はクリモフの「絶対格の機能的拡散性」に相当しそれを新しいキー・ワードで言い換えたことになるが、共時的断面だけに限って言えば勿論現象事実にはちがいない。一方クリモフはその「拡散性」現象の因って

⁸² В. М. Алпатов, Лингвистические идеи Г. А. Климова, ВЯ, 2009, №3 (→本誌木下晴世氏訳)。

⁸³ А. Е. Кибрик, Константы и перемены языка, Алетеия, 2003, p.129; cf. pp.118-125; cf. 同 Очерки по общим и прикладным вопросам языкознания, Изд. Мос. ун-та, 1992, pp.191-192, 他。

⁸⁴ 本稿註 31 (キブリクの類型論構想を略述した)

来る本質を明らかにせんとしたのである。現局面で矛盾した様相を見せしたがって多様に見える能格言語の本質を捉えるには、活格言語の認識は必須でありかつ事象の本質を捉える基盤、原点になるといっても過言ではない。クリモフの本書の主張も正にこの点に重心がある。活格構造（活格性）の認識を欠いた能格構造（能格性）の認識などあり得ない、まして先験的に他動性～自動性を公理として自動詞の分裂という形で活格構造を捉える手法等は「手順が逆である」—存命ならばクリモフはそう主張したかもしれない。ただし、本書の段階での、能格構造の正に根幹に関わる動詞の語彙化原理（cf.他動詞～自動詞の別とその事例）の定式化は、後に「内容類型学の原理」で精密化しているように、クリモフ自身模索段階にあったことも否めないだろう⁸⁵。現局面で諸言語に亘る能格性はそれほどまでに多様化し広いディアパゾンを有することは現象的事実であろう。その意味でキブリクの研究諸事実を批判的に取り込んで行くことは内容類型学の精密化にとって有効であると思われる。

⁸⁵ 主体・客体原理に近似するとした「他」動詞～「自」動詞という定式化は、本書で展開される能格言語シンタグマ論—「統語的基盤を形成する」述語的シンタグマ(主語+述語)と「二次的なレベルの関係にある」補完(補語)的シンタグマ(述語+補語)—にも干渉しているかもしれない。主格言語では、[主語+述語]が述語的シンタグマ(陳述核)を形成し、補語はそれを規定する形で補完的シンタグマ(二次的シンタグマ)を形成するからである。本稿筆者にはトルベツコイのシンタグマ論の方がはるかに明快である。勿論、クリモフ自身、能格構文の補完的シンタグマについてこれが「述語グループ内部の関係」と断っていること、また直接補語と比べたときの主語の述語からの相対的自立性、直接補語の述語への完全従属性、という「構造的根拠」の提示からしても、山口巖教授（『類型学序説』pp.69-70）と同様、能格構文では[述語と補語]が第一次シンタグマを形成し、主語はそれに被さる形で第二次シンタグマを形成する、と説明して然るべきではないのか。クリモフが援用したキブリクの Factitive なる hyperrole の特徴は、正にこの能格構文での[述語+補語]（絶対構文での[主語+述語]）の一体的結合特徴を指したものに他ならないからである。